

二〇二三年版（角川庭園開園十五周年記念号）

すぎなみ詩歌館

角川庭園の短歌・俳句

十五周年記念俳句大会

詩歌館まつり「角川賞対談」



二〇二三年版（角川庭園開園十五周年記念号）
すぎなみ詩歌館 角川庭園の短歌・俳句 目次

角川庭園開園十五周年記念く詩歌館まつり 角川賞対談
「俳句ミーツ短歌」日本語を研きたい……………4

短歌編作品集

野蒜短歌会	10		
花集会	15		
サルビアの会	11		
なおの会	16		
荻窪ときわ短歌会	12	花蕾の会	13
二〇二二年度	やさしい短歌講座	17	

9

俳句編作品集
花芭蕉俳句会 22
萩窪句会 26
泉句会 32
すなおな句会 37
安里句会 41
句歌詩帖草藏 23
青丹会 28
俳句鵜の会 33
まどの会 38
柳元句会 41
すてちまお会 24
くるり 29
ちのね俳句会 34
若之の会 39
鴨の会 42
幻戯会 25
スナメリ句会 31
苗句会 35
佳日句会 40
二〇二二年度 やさしい俳句講座 43
小学生のための子供俳句教室 44

角川庭園開園十五周年記念俳句大会	45
優秀賞の発表	46
俳句大会投句集	56
投句用紙（による投句）	69
メール（による投句）	69

角川庭園十五周年記念・詩歌館まつり
角川賞対談を紹介した主なメディア……… 80

角川庭園開園十五周年記念「詩歌館まつり」

角川賞対談

「俳句ミーツ短歌」 日本語を研ぎたい



対談風景。(向かって左から) 西村麒麟さん、小島なおさん、堀田季何さん

西村麒麟 第65回角川俳句賞受賞
小島なお 第50回角川短歌賞受賞
堀田季何 (総合司会)

堀田季何 ほった・きか 昭和五十(一九七五)年東京生れ、東京、広島、米国で育つ。俳句結社「楽園」主宰。句集に「亜刺比亜」「星貌」「人類の午後」、歌集に「惑亂」。第七十七回現代俳句協会賞。

小島なお こじま・なお 昭和六十一(一九八六)年東京生れ。コスモス短歌会所属。歌集に「乱反射」「サリンジャーは死んでしまった」「展開図」。第五十回角川短歌賞、第八回現代短歌新人賞、第十回駿河梅花文学賞。

西村麒麟 にしむら・きりん 昭和五十八(一九八三)年大阪生れ、尾道育ち。俳句結社「麒麟」主宰、「古志」同人。句集に「鶉」「鴨」。第一回石田波郷新人賞、第五回田中裕明賞、第七回北斗賞、第六十五回角川俳句賞。

すぎなみ詩歌館(角川庭園幻戯山房)は、二〇二三年に開園十五周年を迎えた。毎年、俳句、短歌の講座を開設、終了後は自主グループが結成される。現在、三十以上のグループが歌会、句会を開いている。

角川賞受賞の俳人西村麒麟さんと歌人小島なおさんに出席いただき、歌人で俳人の堀田季何さんを総合司会にお願いして、日本語、短詩型文学の可能性について語っていただいた。

堀田季何さんには今年度の俳句講座の講師、また西村麒麟さんには鴨の会、小島なおさんにはサルビアの会を主宰していただいている。

俳句

—西村麒麟さんの自選四句

ばつたんこ手紙出さぬしちつとも来ぬ
冬ごもり鶉に心許しつ
絵が好きで一人も好きや鳳仙花
金沢の見るべきは見て爛熱し

—小島なおさんの好きな西村麒麟さんの四句

すき焼きの大きな肉をずるずると
踊子の妻が流れて行きにけり
夕べからぼろぼろ泣くよ鶯笛
鰻重を真つ直ぐ伸びてゆく光

短歌

—小島なおさんの自選四首

講堂で賛美歌うたう友達のピアスの穴を後ろから見る
防砂林歩みつつ聞く南風どのようにに風は老いるのだろう
思ふひとなければ雪はこんなにも空のとおくを見せて降るんだ
夏服をすこしほだいて秋服へひとびとをほだいて戦闘へ

—西村麒麟さんの好きな小島なおさんの四首

老人ホームにひるの月あり祖父とわれと共鳴しているごとく黙りぬ
ムササビのような寝姿恋人がいますと思えずわが妹よ
風の日は橋がひかるよ地上からすこし浮かんでひとを思えり
短冊を絵馬をなびかせおおいなる頭部この世はすべて願いごと

堀田 私は、俳句と短歌の両方を作っています。「どちらを本気で作っていらっしやるのですか」「どちらがお上手ですか」とよく聞かれたものです。最近、高橋睦郎さんが、俳句界の最高業績をたたえる蛇笏賞を受賞され、さらに同様の短歌の賞である遼空賞の最終候補者までになられたこともあります。ここ十年、ようやく両方作っていても良いのだと思われるようになりました。

今日は、俳人の西村麒麟さん、歌人の小島なおさんに、それぞれ自選の句と歌をお示しいただき、作品について語っていただきます。さらにお互いに、好きななおさんの歌、好きな麒麟さんの句を選んできていただいております。

西村 私は、俳句以外のことに向かうと、句づくりのリズムが崩れると思います、俳句を作ってきました。ですから、短歌を読むことは、好きですが、短歌を作ったことは、過去に一度だけです。

小島 私は、俳句が好きで、二か月に一回ぐらいの割で、句会に参加しています。一生懸命作りますが、俳人からは、短歌くさい俳句だと言われています。

麒麟俳句を読む

堀田 麒麟さんの自選の四句は、自分のことを詠んでいる。少し風流な気分になっている麒麟さんの分身の句のように思えます。それに対して、なおさんが選んだ四句は、必ずしも、麒麟さんのことではないように思います。俳句は、作者と作中主体が明確ではない文芸と言われます。

西村 実は、私の四句は、私自身のことを詠んだものではありません。ばつたんこは、半分くらいが私です。冬ごもりの句は、病に悩まされている正岡子規になって、詠みました。自分のことと思われて、しめしめです。絵が好きでは、例えば川端茅舎です。病弱なので、絵が自由に描けず、句づくりに勤しんでいる。金沢の句は、平家物語、落ちていく平

氏の気分を詠みました。

反対になおさんに選んでいただいた句は、どれもが私自身です。すき焼きを食べ、踊っている妻を見ています。鶯笛は句友の死の悲しみです。鰻が輝いているのを見ている。自分をはっきりと出したくはないので、主人公の鰻重に輝いてほしいのです。

堀田 麒麟さんの句は、技があるのに、技が見えない。さらっと表現されている。玄人好みの句と言えるかもしれません。例えばすき焼きの句、初心者では切れを入れたくなる。切れを入れずに「ずるずると」につながる。絶妙だと思います。

西村 私は、意識して、無意識を見せるようにしています。

堀田 俳句的俳句という言葉がありますが、短歌に変えることが出来る俳句もあります。寺山修司は同じ発想で俳句と短歌を作っていますが、どちらかが良くて、どちらかがだめ、両方成功した例はありません。麒麟さんの俳句は、まさに俳句の世界だと思います。

麒麟さんの俳句を短歌にすることが出来るか、チャレンジしてみました。例えば、ばつたんこの句です。「ばつたんこよく鳴る月の夜更けなり手紙出さねば」とすると短歌になるようですが、情緒過多は免れません。金沢の句、鶯笛の句も、短歌にすると情緒過多のお涙頂戴短歌になつてしまいます。さらっと言つてのけている麒麟俳句には敵いません。

鶉の句は、「冬深みひとりこもれば子飼ひなる鶉手にのせ頬近づけて」でしょうか。結局、近代短歌風で終わつてしまいます。鳳仙花の句は、短歌にすることは不可能です。

小島 その鳳仙花の句ですが、私が句会に参加するとしたら、「絵が好きで一人も好きやマヨネーズ」としてしまいそうです。絵が好きと一人が好き、好きの位相の違いの面白さがある、それを鳳仙花の赤色の花が、きちんと詩的に受けとめてくれている。しかし短歌では、もう一つ飛躍をしたい、もっといろいろなことを考えるきっかけとして、拡散させた

い。マヨネーズをてことしているところがあります。現代短歌は、そこから新しい詩が生まれるかもしれないと、挑戦をしているとも言えます。

西村 私は、そのために、かえって現代短歌が読みにくいと感じています。

私の他の句も、季語のかわりにマヨネーズは使えそうですね。ただ俳句は、面白くさせようとすると、面白くなくなる。笑わそうとしていることが少しでも見えてしまうと、それが臭みになってしまいます。

なお短歌を読む

堀田 なおさんの自選、麒麟さん選のどちらの短歌を読んでも、小島なおさんの歌だと思っています。

小島 今までに歌集を三つ出しているので、第一、二、三歌集からそれぞれ降の一首を選びました。私の歌は、歌集ごとに変化しているので、その変遷をどう理解していただけるか楽しみにしています。

西村 例えば、老人ホームの歌は、省略が効いていますね。「共鳴している」で、理屈を書かずに、言葉が上手につながっている。自然に短歌を味わうことができました。

ムササビの歌では、無邪気な妹の知らない一面、そのおもしろさと寂しさが伝わります。

堀田 今度は、なおさんの歌を俳句にしてみました。例えば、老人ホームの歌は「祖父とわたし黙るホームや昼の月」とすると、共鳴という肝の部分がどうやっても入らない。「老人ホーム祖父と共鳴してや月」としても、何かもの足りない。

ムササビの歌は「ムササビのような寝姿クリスマス」でしょうか。妹は俳句だから省力できるとしても、恋人がいることは伝えられない。

風の日の歌は、「橋の上に人思ひをり風ひかる」くらいですかね。その結果、「少し浮かんで」という、素晴らしい措辞がどうやっても入らない。

まさに短歌だからこの世界です。普通に季語を用いて、俳句にするとただの平凡な句です。情緒がなくなり、気分だけの句になってしまいます。俳句にするとスペースがなくて、抜けてしまいますね。

小島 褒めていただいて、うれしいです。「共鳴」とか、「すこし浮かんで」を良しとくださっていますが、俳句に転じると作句になりませんか。

西村 共鳴は漠然としているので、句会ではやり過ぎといわれるかもしれません。「そつと共鳴しておりぬ」ぐらいですかね。

小島 私のピアスの歌は、描写を意識した、俳句濃度が高い歌だと思います。

堀田 でも、俳句にすると、友人を後ろから見ていることにスポットが当たってしまいます。講堂で讃美歌を歌っていることは、短歌になってはじめて伝えられることができます。なおさんの四首目、夏服の歌は、難解ですね。

西村 この歌だけをとると、夏服から秋服への衣替えの季節、街も秋模様、さつそうとおしゃれをして出かける。それも私の戦争だよと読めば良いかと思いました。

小島 俳句を作られる方は、夏服、秋服の季語をやはり中心にして読まれるんですね。夏から秋への景は、グラデーションがかかっていくように、ゆっくりと変わっていく。その様は夏服をほどこいて秋服を着るようになるようだ、その日常の延長に、ウクライナの戦争があるのではないかと、社会的メッセージを投げかけた歌です。

堀田 俳人であれば、まず季語の夏服と秋服に目が行きます。それに下の句が繋がっていくように読みますね。

小島 短歌の場合、下の句を主にすることが多い。夏服をほどくのは、下の句の本題のためのスプリングボードです。日常生活がほどこれるようにして、戦争に巻き込まれていくのではないかという不穏を歌にしたかったのです。

西村 下の句が大切ということであらためて確認させていただきました。

小島 馬場あき子先生は、新聞歌壇の選にあつては、まず下の句を見るとおっしゃっていました。下の句の良いものを選び、それから上の句を読む。だから選は早いのだと聞いたことがあります。

堀田 短歌は下句でぐさっと刺さることが大切です。名句に下句をつけても、俳句が完成しているのですから、良い短歌になるわけはありません。反対に未完成の俳句、ゆるい俳句に下句が刺さって、良い短歌になる可能性があります。反対に未完成な短歌は、素晴らしい俳句に変身する可能性があるわけです。

いい歌、完璧な短歌は、三十一音でちょうど良かったと思わせてくれるものだと思います。読んだ後に、はい、そうですかという歌はだめです。詩的な飛躍や余韻、余白が大切です。考えさせることもなく、感情も揺さぶらない歌はだめですね。

西村 俳句も同じですね。言い尽くしてしまうのではない、余白が重要です。はいそうですかでは、報告になってしまいます。

俳句の私と短歌の私など

小島 俳句の美意識は滅私、自分自身を薄めていくところに俳句らしさがあると思って、麒麟さんの句を選びました。ただ手紙を出さない、一人が好きという句は、どちらも麒麟さんらしさを感じます。俳句における私性はどのように考えれば良いのでしょうか。

堀田 短歌的な私性とは違います。短歌では作者と作中主体はかなり近く、ほとんどがノンフィクションです。俳句でも自分が投影されていますが、必ずしも自分とは限らないことがあります。

小島 短歌も一首ごとに読めば、同様なことが言えますが、歌集で読む時は、私が前面に出ます。麒麟さんの作品を句集で読む時、例えば子規のこと、金沢のことを麒麟さんの冬ごもりとして読まないのでしょうか。

堀田 一読者としての感想ですが、どの句にも麒麟さんらしさがありますが、ひとりの人物は立ち上がってきません。一句一句が独立をしていて、いろいろな解釈ができるからです。

西村 私は、作句にあたり、自分のことを人に見せるのは照れくさいところがあります。私なのか私でないかを曖昧にして、季語に託します。俳人の多くは、私のことを見せるのが苦手の人たちのようにも思えます。

堀田 俳句という詩型が、短歌のように私を前面に出さない。喜怒哀楽を抑えてくれているように思います。ただ私の場合、俳句に自分をぶつけます。反対に短歌では、私性を抑えるようにしています。

西村 私にとって、季何さんの歌が読みやすいのは、そのせいですね。

堀田 人間探求派と言われる石田波郷は、境涯、闘病生活を詠みましました。短歌に近い俳句だと思います。それでも俳句ですから波郷の立場ばかりではなく、いろいろな人の立場で、作品を読むことができます。

小島 俳句には、歳時記という共通のテキストがありますね。それが拠り所になり、俳句が作られてきました。

西村 桜と言えば、芭蕉の俳句と現在私たちの俳句はつながっています。

反対に短歌の桜は、後鳥羽院の桜と現代歌人の桜は別なものと思っています。

堀田 季語の本意に本情が少しずつ加わっていくような形で、俳句が作られてきました。名句を意識し、半歩ずつ変化してきたといえます。短歌は名歌をくつがえすことに力を注いできたともいえます。

小島 長く歌を詠んでいると、ひとりの歌人が十以上の歌集出すことも、めずらしくありません。読者は、歌集を読むことで、歌人の生活ぶり、歌人の人生を歌と重ね合わせます。

西村 若い歌人であっても。三、四年に一冊歌集を出されているように思いますが、俳人は、作品を貯めますね。十年で一冊句集を出せば、まあまあですね。二十年経ってやっと一冊にまとめた俳人もいます。二十

年で掲載した三百〜四百句を除けば、あとは捨てることになる。俳句は、多作多捨の文芸といえます。

小島 短歌は十の力のうち、三の力で作り、残りの七で推敲を行い、作為を消していつて完成させなさいと言われたことがあります。

西村 俳句で推敲をしすぎることを、私はあまり好みません。手が入りすぎると、句がくすんでしまう傾向があります。

小島 句会に参加して驚くことは、無選句は開けず、無視されてしまうことです。一生懸命作ってきた作品に対して失礼だと思うのですが。

西村 句会は、良いものを褒めあう場ですから、誰も注目をしなかった無選句はそつとしておくことが多いです。

小島 歌には、作者の私が入っています。その人の心が歌われています。一点も入らなかつたからと、コメントを避けることは、その人の心を無視することに近い。最近の歌会は、悪い所を指摘するより良い所(発想や斬新さなど)を見つける。最高の読み方を考えるようになってきたように思います。

堀田 そこにも俳句と短歌の性格の差がある気がします。句会は、その場、その座を分かち合う、楽しむことが最優先です。無選句は、武士の情けで触れないようにし、良いところを褒め合い、分かち合います。俳人は、句会に参加するためだけに、当日その場で作句することもあります。歌会は、前日までに歌を送っておくことが多いです。しかも全ての歌にコメントするから二首が限界です。俳句のように即吟は考えられない。そのかわり、歌人は徹底的に作品について話し合います。歌会は、座を楽しむ場というより、真摯な勉強会ですね。性質は違いますが、句会も歌会も、どちらも素敵だと思います。

——本日は、ありがとうございました。

(二〇二三年十月二十九日 角川庭園詩歌館まつりより)

短歌編

作品集



野蒜短歌会

発足年 一九九九年
開講日 第三土曜日十三時
参加人数 九人

講師 石川幸雄

昭和三十九（一九六四）年、東京都生れ。学生時代より短歌を始め、同人誌「開放区」に参加。休刊後、詩歌探究社「連」を結成。個人誌「晴詠」編集発行人。歌集に『解体心書』他、歌書（共著）に『誰にも聞けない短歌の技法 Q&A』、『恋の短歌コレクション 1000』、『固有名詞の短歌コレクション 1000』ほか。現在、十月会会員、現代歌人協会会員。

短歌とは風のようなり吹かるれば景色が変わる心が動く

石川幸雄

逝ったきり誰も帰って来ないからきつといいところにちがいない

篠遠義子

転生は望まざりしもクラゲならものごとくなく生きらるるかも

大勢の仲間と共に笑えぬは難聴のせい耳は寂しく

ライオンの毛皮とこん棒オリオンの顔まで見ゆる冬あからさま

心癒えて妹の声おだやかに十月の空に鰯雲広がる

関川歌代子

早起きし体操済ませ玄関の靴を揃えて姿勢を正す

太田梅子

タイガース「アレ」の風吹き日本一 ぶつきら岡田の片えくぼ見る

野口亮造

一日を何も云わずに過ごしてる心のなかで喋るべちやくちや

七十五年前の野球小僧らといることし友の便りはふるさとの風

吊り革をつかめばあとはゆれるまま電車で学ぶ生きてくコツを

大室英敏

落日を映して燃えるビルの窓ジェリーボックスだよ新宿ナウ

萩谷宇彦

成り行きで貧乏くじを引くけれどこれが人生にわか雨降る

雨はもう淋しげな色ね燕はもうとつくに帰ったわ私も もう

光る海に心躍らず老いの波寄せては返す忘らるる水着

桑崎公美子

水遣りのじょうろ・バケツに列をなす午前六時の区民農園

山口とし子

山椒の実梅の実薙漬け終へて主婦仕事了ふ最後の保存瓶

例年になく猛暑が続く行き交えば挨拶よりも先に「元氣？」と

ご祝儀を啜えて獅子は舞い跳ねるヒトであること子
に知らしめて
山田恵子

サルビアの会

発足年 二〇一六年四月
開講日 第三火曜日 午後
参加人数 十五人

指導 小島なお

こじま・なお 昭和六十一（一九八六）年、東京生れ。二〇〇四年、角川短歌賞受賞。歌集に『乱反射』（現代短歌新人賞、駿河梅花文学賞）、『サリンジャーは死んでしまった』、『展開図』。入門書に千葉聡との共著『短歌部、ただいま部員募集中！』。二〇二〇年度「NHK短歌」選者。日本女子大学非常勤講師。コスモス短歌会所属。

高々と恵比寿を掲げて福を撒く人形遣いの若き二の腕

夏服をすこしほだいて秋服へひとびとをほだいて
戦闘へ

小島なお

刀剣を研磨する役目を終えた伊予の砥石をまだ捨て
られず

桑田規代

敗北を受け入れる能力、という魚が去るのが見え
た

重力の世界でここは、おやすみと言えば瞼はとじ
られてゆく

剣道の面紐買いに阿佐ヶ谷の熱波抜けゆくサンダル
の吾子

高瀬浩子

無理だよと言われ登った月見坂どこが難所か分から
ぬままに

形変え動き続ける遅夏の雲の語りに耳かたむける

猪又千鶴子

通学の女子達の中その人の視線は一瞬、手でつかみ

手塚宗

わらじ履き石道ゆきし先人と同じ石踏む中山道で

たい（タカシちゃん、すっかり田舎ことばに）と叔
母はやさしく吾を見詰めぬ——終戦直後の再会

たましひを向上せむと生まれたる秋の螢の禅寺の中

小川明宏

無精髭剃らずに過ごすこの頃の我に親しき庭の荒草

林璋

鞆轡を漕げど届かぬ恋をして八十八夜の月のやさし
き

ミルトンも苦笑するらむ「失樂園」役所と黒木の濡
れ場を見れば

微動だにせず女王の葬列を並び見送る馬とコーギー 東美保

この雪がとけたらいつでもまたおいで秋山郷のおんな主人よ

茶の花の丸い大きな膨らみに蜩蝶くる垣根の小春 平田順子

朝日受く露の光の七色に短かい命惜しみなく充つ

半円を大きく拡げた富士山の裾野で目覚む 春はあけぼの 廣瀬令子

移りゆく銀杏並木の木漏れ日は思うひといふ少女の時めき

信長も見てただろうかと語り合い隣人と見る赤胴の月 藤村寿子

白藤のブルーライトに惹き込まれ白息混じりで佇む人々

葉の花と富士を楽しむ吾妻山一月すでに春をまんきつ 湊美恵子

バスの中咳するだけで席たたれ皆ナーバスなコロナ禍の冬

奈良井宿過去のにぎわいかもす店しゅう雨を避けてまごのてを買う 村上よし子

山肌に食べられそうな綿雲が楽しく調和す正月のあさ

ラベンダー色のブラウス着るたびに胸にながれる小椋佳の「時」 山名暁子

「それじゃあね」そのひと言でそれっきり会えない事がある 吉田武子

なりゆきのままに過ぎた日はるかぜの湖畔に婚の鐘鳴り渡る

猿山のサル出揃うて宴会がはじまるよ月がまんまる

荻窪ときわ短歌会

発足年 二〇一七年四月
開講日 第一日曜日 午後
参加人数 十人

講師 内山晶太

うちやま・しょうた 昭和五十二（一九七七）年、千葉県生れ。一九九二年より作歌をはじめ。二〇一二年、第一歌集『窓、その他』（六花書林）を刊行。翌二〇一三年、同歌集にて第五十七回現代歌人協会賞受賞。「短歌人」編集委員。「pool」「外出」同人。現代歌人協会理事。

熟れ落ちしすもをひろうつとりとなめくじの 内山晶太
乗る雨後のすもを

夜を昼を透きとおりつつこの小皿落とすとき化けてでる不可逆は

蜘蛛のことふかく知らざれば前世のあらばそれぞ
れが天井画

病んでみてつくづく思う友たちは色とりどりのフ
ルートみたい

めざすのは生産緑地のしだれ梅冬とお別れできるで
しょうか

春雷に傘をつぼめてかけこみし赤坂サカスに志の輔
を聴く

三日では治らぬだろうこの風邪は 覚悟を決めて
キャンセル入れる

石澤久子

北村章子

小林美代子

篠原よしみ

虫の音も途絶えがちなり秋深し寒さしのぎのカー
ディガン着る

グラントは満月の下輝けり 土には見えず漆黒鉄板

散歩道うぐいすの声聞こえる待ちに待ったこの
瞬間よ

ふる里に母を見舞いし帰り道白き子猫ら戯れていた

炎天下コーラごくつと飲み干せば体の中にさざ波の
たつ

骨付きの魚が旨し言う義父の 施設に在れば昨日の
夢か

高橋正人

橘日出世

中村直子

流割章子

松浦恵美子

嶺みどり

花 蕾 の 会

発足年 二〇二〇年四月

開講日 第二月曜日 午後

参加人数 十二人

通信添削あり

講師

生沼義朗

おいぬま・よしあき 一九七五年、東京都生れ。一九九三年から作歌を
始める。翌年「短歌人」に入会し、二〇一七年より編集委員（選者）。
歌集『水は檻裡に』（第九回日本歌人クラブ新人賞）、「関係について」、「空
間」。二〇一九年度角川庭園「やさしい短歌講座」講師を経て、「花蕾の会」
講師。日本歌人クラブ中央幹事、埼玉県歌人会理事、現代歌人協会会員。

人名よりはじまる記事は訃報かと一瞬思うなりい
つからか

生沼義朗

朱印帳に短くお経上げくれし時宗の寺の忘れがた
しも

雪ふればしんしん冷えて隧道のなかにおりたる感
の極まる

シルバーパス初めてもらう窓口に「楽しんでね」と
笑顔で言われぬ

上嶋玲子

どこかしら似た顔ばかり 納骨の日に集い来て「ちゃ
ん」で呼び合う

鶏肉を二枚ボン酢に漬けて込んで何も無い日に焼いて
食べよう

花時計レマン湖噴水サレブ山の思い出揃うマゲネッ
トを買う

またひとつ渋谷の街の書店閉じ260メートルのビ
ルが建ちおり

久が原に一人住むひと女の表札は太い明朝で齋藤と
あり

終電の橋本行に駆け込める黒Tシャツの若者ふたり

環八の分離帯にも猫じゃらし青梅街道渋滞中なり

夕暮れの都営団地の一隅におしろい花は白色ばかり

公道に積雪ポール立ち並び雪虫飛び交う故郷に居る

水玉のパラソルとすれ違うときに無地の私が思わず
ゆずる

ソニービルとうとう壊されアイドルもさっぱりとし
た素顔にもどる

サンプラザ建て替えと聴き知らず知らず心のうちに
白くそびえる

陰性とふメール届きて仏壇の千日紅をダリヤに変へ
る

佐倉清一

関川歌代子

高橋れい子

中尾順一

次郎柿のぬるりと固き皮をむく滑る刃先はわれに向
きをり

3Dの樹脂成型の観音の魂入らぬ顔のやさしく

腕立て伏せ50回目はフランスパンの固きを噛みきる
気力で上げる

奥多摩の山の帰りはカツ井と独り言して林道を下る

「手のひらに秋の光を受けてみて」晴れ渡る朝に子か
らのメール

ひとつつつ積まれゆきたる婚の荷に淡雪のごと梅の
ひとひら

散り敷ける白きさざんか雪のごと月の光に清^{すが}しかり
けり

水鳥の胸ふるはせて立つしぶきに春のきざしの光は
跳ねる

この秋の同士いるらし図書館の二巻目が抜けた「カ
ラマーゾフの兄弟」

隊列の小さき児らにも仕切る児と仕切られる児と意
に介さぬ児

雪に立つポストの内に待つだけの時間流れる空間が
ある

湯の少なき湯槽に浸かるイリュージョン並に身体を
折り曲げながら

中西京子

橋本めぐみ

水飴の気泡のように動かない夫婦ふたりの午後のリ
ビング

ワールドカップ日本戦の既視感はなんだろう？ あれ
だ！ ロフテッド軌道

森村利恵

キヨロキヨロと頭うごかし芝踏みしめ帽子にポ
シエットまるで探検家

自転車に乗せられドナドナ ワンちゃんはささみを
買いに市場にゆくよ

黒白の布の名前は〈鯨幕〉 ニュースに知れば国葬の
日や

若松優子

相田みつをに斜め上から叱られるお好み焼き屋のト
イレの個室

高尾駅の西より向こうに車止標識ありぬ父の命日

コインパーキング「タイムズ」ほどの墓地がありお
なじ苗字の石ならびある

『葉隠』が置かるる患者図書室に其を寄贈せし人をお
もひぬ

新会員募集中 毎回題詠あり。詠草は題詠自由詠合わせて一回一人三首まで。参加費
は一回一五〇〇円。他に経費として会費(半年)二千元。通信添削も受けつけています。

花 集 会

発足年 二〇二一年四月

開講日 第二火曜日 午前

参加人数 十人

指導

花山周子

はなやま・しゅうこ 昭和五十五(一九八〇)年、東京生れ。一九九九年、
「塔短歌会」入会。歌集に『屋上の人屋上の鳥』、『風とマルス』、『林立』。
二〇二二年末、塔短歌会退会。現在、同人誌「外出」同人。

平日の井の頭公園はぼっかりと鳥の声まで落ち着
いている

花山周子

ブルーシート羽織りのようにかけられてスワン
ボートは頭並べる

秋の陽射しに影を落として歩みゆく井の頭公園の
端の方まで

—令和四年七月十四日帰省—

故郷に迎える人は居らねども吾を包める熊蟬の声

春日満喜志

冬のはじめの高き枝先に鵲鳴きぬ夕陽を浴びて塹へ
帰るか

環八を行き交う車光放つ二月の光反射させたり

小森谷栄子

切れ目なく車行き交う環八の上は無限に抜ける青空

紅玉を砂糖使わず甘煮する　じょっぱり　うんだ
ねー津軽あかつきの会

佐倉清一

参道にぎんなんは踏みしだかれて昨夜きぞの祭の賑わい
のあと

藤井公子

島忠の雑貨担当の志村君　先輩女子と売り場を廻る
見つければ拾ってしまう団栗は床に畳にころころ転
がる

関川歌代子

母の日が他人事だと思ふ日は犬の散歩も足早となり

本橋正敏

二階まで届く梯子のはだし足袋ベテラン大工の仕事
を見ており

夏の蝶炎天抜けて庭に來ぬ盆さなかの最中の母の命日

林摩利子

叔母さんが手押し車で来るといふ無理しないでと孟
蘭盆会の日

山下幸子

シャリシャリと小さな口で梨を食む犬と並んで秋の
月見る

一つ一つ大事なものを無くしゆく父の老いの日酷暑
が続く

な お の 会

発足年　二〇三二年四月
開講日　第一火曜日　午後
参加人数　十人

指導
平岡直子

ひらおか・なおこ　昭和五十九（一九八四）年生れ。長野県出身。
二〇〇六年に作歌をはじめ、二〇一二年に第二十三回歌壇賞受賞。
二〇二一年に歌集『みじかい髪も長い髪も炎』を上梓。同歌集で第
六十六回現代歌人協会賞を受賞。現在「外出」同人。

水温を手でたしかめる夜深く秋にすこし重心をう
つした

平岡直子

新聞も捨てたものではないけれど風に吹きあげら
れて、先生

手は煙草をもう探さない　東北の訛りのように花
はこぼれて

大倫の白き朝顔陽に透けて「どうするのよ！」と問
いかける夏

青木江美

「せんせい」と言う時くちびる閉じなくて　海が入っ
てくるよ気をつけて

千尋

舌出した傘のお化けを描いて見せ幼き妹を苛めた私 香取真美
放課後の校庭初の逆上がり「おおっ」と先生の声遠くから 田中真理子
骨ばって日焼けした手の男らのターレー行き交う魚 松尾みゆき
市場の朝

二〇二二年度

やさしい短歌講座

発足年 二〇二二年四月
開講日 第一月曜日 午後
参加人数 十四人

指導

山内頌子

やまうち・ようこ 昭和五十二（一九七七）年京都市生れ。平成八（一九九六）年塔短歌会入会、河野裕子の選を受ける。歌集に『うさぎの鼻のようを抱きたい』『シロツメクサを探すだるうに』。現代歌人協会会員、日本歌人クラブ中央幹事。

アリクイは60センチの舌使い壊した巣にいるアリを舐めとる 松本義彦

胸内をどれだけ速く動いても舌は心のからくり人形 山内恵美子

新しき蕾つけたる梅の木は今日のよきことのみ浴びており

山内頌子

ねこじやらしこの世の猫をじやらしたりわずかな空き地になったところで

海原にひとすじ道を見るような思索のちに駒を進めぬ

目玉焼き温泉卵オムレツと変身しても愛されるきみ

すべり台裏の墓にて眠る爺まなざし注ぎ家人を守る 岩永万里子

細い茎風に揺らいでミニトマト何処まで伸びる実をぶら下げて

卵掛け生は否だとフライパン緑も入れて色鮮やかに

指先に雨の冷たさ沁みる日はぬる爛飲める父を思いぬ 大野たま子

靴ひもを結ぶ夫の髪を見て共に歩んだ歳月を知る
ボストンで遠くかすんだ月見れば半日早く見る君想う

池野宗子

夏色のパンツを買えば馴染みよくウクライナ産とラベルの裏に

今年こそ旅に出ようと案内のカラーのページ手渡す
夫は

この香り二時間前はしてないわ 金木屋の秋が来た
のね

進化する携帯電話 私には使えぬ機能どんどん増え
て

庭隅の金木屋が枯れていた秋には香りさせていたの
に

冬の朝木箱を作る生徒たち釘打つ音は凜として響く

亡き母の四十九日を前にして母の部屋まで草取り進
む

亡き母は出陣学徒送るなり篠突く雨は制服濡らす

新月に十の願い記せども大切なのは皆で幸せ

黄桃をつるとむきてまん丸の中秋の名月てのひら
に

あるじなき山房に寄り折々の庭ながむれば歌会遊戯

夕暮れのあかねの空を眺めつつつめたき風に足どり
早やまる

秩父路に梵鐘ひびく夕暮れの小径を急ぐ老夫婦の声

小木のり子

尾張英治

清水愉美

高木昇

暮なずむ寂しき小径を一万歩冷たき足先更に冷たく

小さき手ハンドル握り坂道を緑の風切り進めよ進め

サクサクと銀杏の絨毯踏みながらあの世のメイと日
暮れの散歩

除雪車の音に起こされ窓のぞく降りしきる雪静寂の
庭に

朝の五時涼しきうちと本を読む声に添ふごとみんみ
んの鳴く

陰暦の師の誕生日に集いよる友らと競う韓国ユニノ
リ

義母逝きて料理上手を思い出す八年経てど未だ届か
ず

無人駅教会のある小さき村残る部屋には椅子ひとつ
あり

電球の灯りに浮かぶ横顔に絡めとられたバンコク深
夜

新しき顔に出会いし啄木館人たらしと言う言葉の持
つ意味

宙を吸う泰山木の白い花ロダンの首と神様詠まれ

十五色短歌詠む人らは色鉛筆館はキャンバス夢色に
染まる

田中るみ

種田純子

中村和子

平倉美都子

収穫の梅実醸され琥珀色角川ブランド「詠人」の酒

香の道我に響かず全ハズレ娘花丸面目ないわ

山崎知子

またひとつ皆の思い出幕下ろす東急本店グッドバイ
バイ

雪遊びプールに花火バーベキュー幼き子等と過ごした庭よ

洗濯のレースカーテン何処より飛んで来て居る冬の
蠅かな

吉岡裕子

天空をゆらゆら撫でて澄ましおり　すすきの穂先わ
が心にも

空高くパンの焼けるを待つ間七時のニュース戦局聞
こゆ

講座修了とともに、二〇二三年四月より山内頌子さん指導の「シロツメクサの会」が発足しました。

俳句編

作品集



花芭蕉俳句会

発足年 二〇一〇年四月
句会 第二木曜日 午後
参加人数 八人

指導 寺澤一雄

てらさわ・かずお 昭和三十二（一九五七）年長野県生れ。大学の作句演習で実作と句会を知る。大学の同好会を経て、いくつかの俳句結社を経験したのち、俳句同人誌「恒信風」に創刊同人として参加。二〇一一年に同人誌「鏡」を有志で創刊。「だれにでもわかる句を作る」が目標。句集に「虎刈」。

手に受けし硬貨の臭ひ夕端居 寺澤一雄

溶接の光遠くに新樹の夜

菜の花の茎の断面束ねられ

点滴の窓の外より蝉時雨 今井真知子

バス曲がる大きくゆつくり初御空

訪ね人なき玄関の白紫陽花

眠る子へ眠る子犬へ団扇風 大本睡杏

蝉取りの少年永遠に半ズボン

炎天やネクタイ正しベルを押す

ブラウスの背中ふくらむ青嵐 大本恵子

土壁の寺町初夏の串団子

冴返る屋根職人の足袋の裏

夏兆す武蔵野の森輝きて 小森谷栄子

虚子像やなんじゃもんじゃの白き花

絵はがきはマッターホルン夏の旅

土壁に雨の跡濃く梅雨の入り 中川路邦子

玄関の返事待つ間の蝉時雨

夏鴨の貫禄つきて池狭し

神の愛説くプラカード酷暑中 中崎啓祐

大夕焼たるむ電線はしる町

玄関に汗かいている牛乳壺

しつけ糸解す夕暮れ紵の喪服 吉田圭人

弁当に林檎のうさぎ跳ねる耳

ひとひとひと桜紅葉の無人駅

句歌詩帖草藏

発足年 二〇一〇年四月

開講日 第一土曜日 午後

参加人数 七人

指導 佐々木六戈

ささき・ろくか 昭和三十（一九五五）年、北海道生れ。俳人・歌人。作歌から始め、一九九二年、俳句結社「童子」に参加。二〇〇二年、句歌詩帖「草藏」、十九年「艸」創刊。第四十六回角川短歌賞。著書に『佐々木六戈集』（セレクション俳人）、『佐々木六戈集』（セレクション歌人）、『佐々木六戈詩集成』。

醒め極のミモザの花を手折りしが 佐々木六戈

いふなればペパーミントな間柄

馴鹿の櫛を絵本に老いゆくも

報ありてももの芽の一斉に立つ 葭澤美絵子

京へ上る草舟折らんかきつばた

棺桶に薯入れて叱られし子よ

家系図はブラジルに飛び春の土 鳴奈千

棒杓も流れに馴染み夏始

冬浅し老いの初心者此処に在り

人去りし後起き上がる涅槃像 荒井八雪

針穴なべて楕円形なる冬に入る

長点も平点もなし水つ湊

修司の詩卯月曇りの本棚に かつうさきこ

相談に乗ってくれさうなる案山子

手袋を外して何を書き記す

鳥の巣や産着たためる手に日差し 山内こころ

ウキスキーグラスに挿していぬふぐり

靴音の吾が家遠退く古暦

刈り進む夏芝に富士匂ひけり 山田やよひ

クリスマスソングのひびく豆腐買ふ

寒肥や終の栖と定むべく

すてちまお会

発足年 二〇一〇年四月
句会 第二日曜日 午前
参加人数 十九人

指導 阪西敦子

さかにし・あつこ 昭和五十二（一九七七）年、神奈川県生れ。祖母の勧めで七歳より作句。「ホトトギス」同人、「円虹」所屬。日本伝統俳句協会新人賞。『天の川銀河発電所』『俳コレ』入集。

蟻螻や階段を人降りて来る 阪西敦子

あふむけば天より瀧の滾り落つ 京子 二〇二二年八月

ごろごろと梅酒作りの午後長き

塀つたふ猫と目が会ふ無月かな 二〇二二年九月

埋火やひとり眠ればひとり覚め

夏めくや踵を踏みしスニーカー 悦子 二〇二二年五月

道の辺のこんな所に勿忘草 稲子

七竈七歳の子の髪飾り 泰司 二〇二二年十一月

山荘の籐椅子ふたつ窓際に

お彼岸にせがまれて行く天麩羅屋 二〇二三年三月

幼少時竈の火つけ埋火から 弘則

鬼蓮の葉を押し来るは鯉の口 嘉子 二〇二二年六月

S Lの煙に消さるげんげ畑

滝裏を抜けて現世の光受く 二〇二二年八月

山藤や瀬の水辺に触るるまで てる子

初夏やしやらんと揺れる貝ピアス 章 二〇二二年五月

春の風邪夫置きてゆくメロンパン

ラムネ玉コロんと過ぎし日の見えて 二〇二二年七月

餌箱に最初の一羽秋日和 敏光

少年やひげうつすらと男郎花 典子 二〇二二年九月

初鴨や飛び石太き六義園

湯豆腐を掬ひ掬へぬ想ひかな 二〇二三年一月

便箋ににじむインクの春愁ふ 俊彦

紅花や紅ひそめ棘かざす 敏江 二〇二二年六月

見渡せる太平洋の無月かな

無月の夜工場地帯のナイトツアー 二〇二二年九月

幻戯会

籐椅子やあやとりひめを読み直す 容子

二〇二三年七月

湯豆腐やたまに本気で怒ります

二〇二三年一月

埋火や父の振舞う茶の甘き 道夫

二〇二三年十二月

ティラミスはイタリア生まれ福寿草

二〇二三年一月

夕立の脚迫り来る九十九里 保志

二〇二三年七月

投げ上ぐる網に暁光鴨の湖

二〇二三年三月

飲みほせば猫の転がすラムネ瓶 佐和子

二〇二三年七月

岩肌を泡立て走る雪解川

二〇二三年二月

刑務所のある町寂と走り梅雨 妙子

二〇二二年六月

料理書の隅に母の字彼岸寒

二〇二三年三月

発足年 二〇二〇年七月

開講日 第二・四金曜日

午前

参加人数 十七人

指導 鎌田 俊

かまだ・しゅん 昭和五十四（一九七九）年、山口県生れ。千葉県在住。
「河」副主宰兼編集長。句集『山羊の角』。

利き猪口の蛇の目蛙の目借時 鎌田 俊

風驕る塩竈桜散りだせば

髪留めの小貝のひかり聖五月

思春期に五月の森の昏さかな 朝倉さき子

木枯らしやシェパードの耳ぴんと立つ

傍らに飼はず危めず黄金虫 穴井悦子

朝茶汲む今日の朝顔数へきて

それぞれの一人娘や額の花 井出智恵子

荃漬や母の残せし重き石

古日記豊かなる日の文字の濃く 小川明宏

無垢材に飛驒の香りの立夏かな

三分の宇宙遊泳しやばん玉 尾沢久美子

夏至の雨カレーハウスのもれくる香

ひこばえやおのが影踏むおさげ髪 金山佐良子

春風や園へゆらゆら肩車

春炬燵片つけて皆散り散りに 笹本礼子

葱二本抜いて今夜の鍋にする

通学路変はらず在りて梨の花 下平紀代子

夏銀河対局毎の投了図

サングラスはずす夕陽の日本海 高橋 實

万緑の中の一人の車椅子

鏡餅割って大海見てをりぬ 田中有樂

春ごたつ宇宙の端に足入れて

落とし文行方は知れず風任せ 富田 宏

しやぼん玉あの世でとんだどこまでも

空も木も光奏でて春の雷 野村宣子

峰雲やウミガラス舞ふ天売島

木枯しや魔王が歌ふ子守唄 林 璋

山笑ふペッパーミルを捏ねるたび

神のすむ泰山木や花一つ 平田順子

黄金の竹の秋行く益子道

揺り椅子に吸はれし鷹の鳩と化す 吉井雅子

新茶汲む活断層の端にゐて

草原渺茫色なき風を見てをりぬ 吉田武子

山独活を提げて先斗町へ渡る橋

峽は晴れ泥たつぷりと葱の束 渡邊文雄

空色の琉球ガラス夏料理

荻窪句会

発足年 二〇二二年六月
開講日 第一木曜日 午後
参加人数 十五人

指導 日下野由季

ひがの・ゆき 昭和五十二（一九七七）年、東京都生れ。俳誌『海』編集長。
第十七回山本健吉評論賞、第四十二回俳人協会新人賞。句集『祈りの天』
『馥郁』。俳人協会会員、日本文藝家協会会員。

春眠の満ち潮に身を浸しをり 日下野由季

春風や恐竜好きの女の子

行く人と佇む人と花の土手

春眠の己が寝言に返事して 大川千草 二〇二三年四月

池の鯉大口開けて春を吸ふ 木山正義

上弦の月は湖面に夕桜 増田公治

豆腐屋のラッパ近づく街薄暑 大川千草 二〇二三年五月

日本橋高速道路薄暑なり 野口芳枝

一山の如き新樹の櫟かな 増田公治

紫陽花に雨が好きかと問うてみる 小林美智 二〇二三年六月

沖繩の塩振りかけてなめくぢり 大川千草

風呼ぶや芦野の畦の夏柳 増田公治

行き先を定めぬ旅や虹の橋 小林美智 二〇二三年七月

虹立つや水門ひらく小名木川 大川千草

打水に土の匂ひの生まれけり 大川千草

朝顔の一輪とほき海の色 増田公治 二〇二三年八月

朝顔やコンビーフの缶ねぢり上げ 池田絵里子

夕焼をはみだして行く遊覧船 野口芳枝

秋空やボートにひとり女ゐて 増田公治 二〇二三年九月

今日もまた泣いて笑つて秋刀魚焼く 大川千草

「値上げ」てふ幟はためく今朝の秋 増田公治

夕暮れの伯耆大山鳥渡る 木山正義 二〇二三年十月

コスモスや空を映して咲きそろふ 水川怜子

手に余る重さずしりと黒葡萄 大川千草

小春日や夫送り出すデイスービス 早瀬梢 二〇二三年十一月

高々と大熊手行く交差点 大川千草

風の不機嫌さうに吹くばかり 大川千草

短日の八重山峰を舳先越し 白井晴男 二〇二三年十二月

冬薔薇寂しき庭に咲きにけり 島野秀教

禅寺の厠の裏の石路灯り 増田公治

葉牡丹や訪ふ人の少なき日 島野秀教 二〇二三年一月

買初は百寿の母へ千支の鈴 水川怜子

冬さうび赤き一輪固き一輪 池田絵里子

三が日過ぎて槌音響きけり 島野秀教 二〇二三年二月

ドアベルの鳴る美容院春隣 大川千草 二〇二三年二月

分かれ道梅の香りのする方へ 大川千草

薄氷の溶けて水面を漂へり 大川千草

つくしんぼ摘むにしやがめぬ試歩の道
増田公治 二〇二三年三月
裸婦像の乳房に溶ける春の雪
増田公治

大試験仏壇の灰均しをり
池田絵里子

青丹会

発足年 二〇二二年十月
開講日 第一日曜日 午前
参加人数 十七人

講師 林 誠司

はやし・せいじ 昭和四十（一九六五）年、東京都生れ。句集『ブリッジ』
『退屈王』。第二十五回俳人協会新人賞。俳句総合誌「俳句四季」「俳句界」
編集長を務め、現在、「俳句アトラス」代表。俳句愛好誌「海光」代表。

雨つぶのまだ生きてゐる吾亦紅
林誠司

震災忌シネマの闇の中にをり

陽炎へる岩に棹突き川下り
齋藤保志

湖畔ゆく馬の臀筋缶ビール

ビヤホール打つやうに弾くジャズピアノ
篠原賢二

梅の花や出入り自由紀尾井門
今井真知子

脱ぐやふに黒き土より蕪かな

万緑を揺らして渡る祖谷の溪
恋猫に運河逆流して居たり
関口下枝

新米が背伸びしている釜の中
榎本治美

カウンセリング全開のチューリップ

柿光る唐招提寺この先に

源流の清きなるままお水取り
田川嘉子

初旅の一期一会の薬師さま
小久江牙秀

見えぬもの見えてくるもののお水取り

夜の雪変へたる富士のシルエット
よくもとくもなくやぶれちゃうばしょうっぱ
田中久仁子

介護とは人には言えずおぼろ月
木村 凡

北斎の波にサーフィンデケデケデン

母の倍生きてビールがああおいし

水取りの闇踏みしめる足裏かな
富永志保子

下萌の広がる四方へ牛放つ

校庭の陽炎揺らす逆上り 中尾和香子

鮎の香やまた巡りきし岳父の忌

蠟梅やその香に沈む孔子像 平山寛

越中の二上山や虎落笛

葉桜やくちぼそ釣の竿せはし 本間ひらぎ

花やしき切符売子の祭髪

林檎剥く新体操のリボン技 水川玲子

祈り継ぐまつ青な空とひまわりと

宝船メタボの神も笑ひをり 村田みね子

春の雨ビーズに通すてぐす糸

雪の峰崩れて生るる八ヶ岳 山田和子

川風に白鷺一羽秋はじめ

ビヤガーデン泡の向ふは白い月 吉岡七五三

富士山の伏流で洗ふ墓石かな

くるり

発足年 二〇一三年四月

開講日 第三木曜日 午前

参加人数 八人

指導

野口る理

のぐち・るり 昭和六十一（一九八六）年、鳥取県生まれ、徳島県育ち。
瀬戸内寂聴の文学塾に参加。高校時代に俳句をはじめ。平成二十三年、
神野紗希、江渡華子と俳句ウェブマガジン「スピカ」創刊。同年、『俳コ
レ』『天の川銀河発電所』入集。句集『しやりり』。

おほきくなつたよ兔おいしくおもふほど

野口る理

自愛せよぜんまい伸びて空返事 木田捨て助

蛭とほく水族館は濡れてゐる

えっさほいさたけのこ飯を届けなきや 加藤エコ

あたたかき短調こんなにもきのこ

母の日や生命線で笑い転け 柴田ふらり 二〇一三年五月

とまとひとつ生の証のごとありぬ 石田とま女

入社式ここは太平洋の際

吉田ヨシ子 二〇一三年四月

麦秋やごみ収集は水曜日 若林冴え虎

老体のきしきし手足麦の秋 木田捨て助

よりそって生きてきたはず柚子の花 木田捨て助 二〇二二年六月

老いし母顔くしゃくしゃに鰻食む 柴田ふらり

繰り出すはうちの精霊夏の夜 加藤エコ

沼に風ぼんやり甘く鰻井 木田捨て助

遺伝子の明白なる素足かな 原田美穂 二〇二二年七月

母と子は浴衣のがらも同じかな 若林冴え虎

夏のラジオ体操今日は仏滅 吉田ヨシ子

夏至生まれ喜怒哀楽の激しい子 加藤エコ

猿酒鬼も仏も車座に 原田美穂 二〇二二年八月

大花火あかし空も海も人も 柴田ふらり

この国に腹立てあおる瓶ビール 石田とま女

手に余る蔓の強さよ萩の花 原田美穂 二〇二二年九月

秋高し恋の予感が手相にも 石田とま女

コスモス野風が生まれて帰る所 吉田ヨシ子

ライスには塩無花果にはチェンバロ 木田捨て助 二〇二二年十月

甘藷何故か笑うし元気になる 加藤エコ

秋山家干し雑巾に人の影 柴田ふらり

紅葉かつ散り抹茶パフェは崩るる 柴田ふらり

ぎりぎりマフラーを巻く心にも 原田美穂 二〇二二年十一月

マフラーの妹は白赤は姉 若林冴え虎

夜紅葉橋本治的爛熟 吉田ヨシ子

ひき籠る夫に襟巻き巻いて喝 石田とま女

森に果てまた森となる落葉かな 原田美穂 二〇二二年十二月

ゆく年のほこりの中でスクワット 石田とま女

風速計くるりくるりとお元日 赤坂奈緒 二〇二三年一月

特別に父の雑煮はいくら入り 若林冴え虎

冬青空口にカラコロ薄荷飴 赤坂奈緒

霜柱傘で突いたりそつと踏んだり 加藤エコ

映りたるわが顔つつく雑煮かな 赤坂奈緒

したしたと大地ゆるみて春隣 吉田ヨシ子 二〇二三年二月

蠶や無人販売所の小銭 赤坂奈緒 二〇二三年三月

花ぐもりヴィトンの財布拾いけり 若林冴え虎

木から花真白きこぶし凜と咲け 那須悠

石に神言葉に魂の花の園 赤坂奈緒

スナメリ句会

発足年 二〇一三年十月
開講日 第一木曜日 午前
参加人数 十六人

指導 高柳克弘

たかなぎ・かつひろ 昭和五十五（一九八〇）年、静岡県生れ。「鷹」編集長。第十九回俳句研究賞、第一回田中裕明賞、第二十二回俳人協会評論新人賞、第七十一回小学館児童出版文化賞。句集『未踏』『寒林』『涼しき無』。評論集『凜然たる青春』『どれがほんと？ 万太郎俳句の虚と実』『究極の俳句』『隠された芭蕉』など。

浮く桶をしかと掴むや磯嘆き 高柳克弘

虹崩れ落つる大音響を待つ

我也又行きたし鵜舟消えし闇

天空に舞つゝ戻る夜のさくら 鈴木洋子

山のほひ春筍の皮むきをれば

目覚めれば闇深くあり猫の恋 山口美智子

ひっそりと芽吹きそむ木々ビルの街

牛小屋のわらに猫の子重なりて 二見明子

花ふぶき診察番はまだ来ない

一生の自分の時間桜餅 木田和子

大鍋の鰯の梅煮夕やかな

近未来へポケモンぞろり夏木立 伊狩七重

ゴロゴロと実梅洗ふや水香る

朝採りの高原野菜風涼し 辻肇子

羅や話しの尽きぬ三姉妹

バルコニー眼差し遠きまま語る 大矢聖子

つんどくのまた高くなり夏兆す

母の日やまだ手放せぬ文の束 関根陽子

結ぶ手に墨の香残る七夕竹

初夏の風懐かしき声スマホから 藤本信子

早朝に朝顔選ぶ鬼子母神

友来たり切子にとろり古梅酒 宮川真弓

シユワシユワと手花火消えて波の音

書き取りの百字に滲む手汗かな 西井哲郎

悠々と朝顔守の米寿翁

鈴虫に耳を傾け源氏読む 近田吉幸

指先の記憶いろいろ枇杷むけば

朝顔のいろみず透かし空たかく 竹内静江

紅葉を姉妹で愛でる箱根の湯

雪吊りを囲ふる蕾加賀の空 石黒和紀

湘南の浜光らせて鰯を干す

諍ひは夫がをれたり冬林檎 山本和子

短夜やしやべる家電のをんな声

初釜や年に一度の着物の日 持田育司

読初や奥の細道親知らず

泉句会

発足年 二〇一四年四月

開講日 第二火曜日 午後

参加人数 十三人

指導 今泉康弘

いまいずみ・やすひろ 昭和四十二（一九六七）年、群馬県生れ。高校時代から句作。「円錐」同人。第二回俳句空間新人賞、第十二回山本健吉評論賞。評論集『人それを俳句と呼ぶ』、評伝『渡邊白泉の句と真実』。

霧だ、この橋を渡れば俺たちの勝ちだ 今泉康弘

ほうようのさなかのゆきのじいかな

君は今銀河のはずれ青葡萄

閉店のバー入口に紫蘭咲き 藤本ミツ子

水馬や己が水輪を一蹴す 穂坂てる子 二〇二二年六月

蓮池のいつもどこかが揺れてゐる 松井宏文

ところてんきらりとろりとよじれたり 早出和子 二〇二二年七月

浅蜷椀父の眼鏡の曇りをり 大本伸彰 二〇二二年四月

逆様に土から生えて来て土筆 矢野美智子 二〇二二年五月

青嵐や八十路の書家の筆さばき 広松明子

ホースからわたしの虹の立ちにけり 矢野美智子 二〇二二年八月

羊雲に瓦のひびが突き刺さる 伊狩七重 二〇二二年九月

一ページ一句の句集天高し 大本伸彰

夕顔の咲き初めし頃延長戦 町田珠子

きざはしに小悪魔座る野分かな 伊狩七重 二〇二二年十月

落ち葉散り始めの頃はちらし寿司 今富由起子 二〇二二年十一月

もみの木の香りをまとう赤と金 西山慶子 二〇二二年十二月

亡き母の大根漬けの石ごろり 広松明子

冬空に巨大折鶴クレーン哉 今富由起子

ぶり大根湯気のむかうに父の顔 藤本ミツ子

三秒の初富士拝む総武線 松井宏文 二〇二三年二月

街路樹に手袋片方駅を指す 早出和子 二〇二三年二月

繙帯も巻かれぬ猫やたまごとじ 角博之

路の臺相馬の窯火立たぬまま 穂坂てる子 二〇二三年三月

土手萌えるここはわたしのアリスの地 吉田祥 二〇二三年四月

重なりて緋鯉の口のかぶかぶす 矢野美智子 二〇二三年五月

あじさいの段のぼりゆく浄土かな 早出和子 二〇二三年六月

秒読みや棋士の扇子の鳴りやまず 松井宏文 二〇二三年七月

とりあえず買物かごにバナナかな 穂坂てる子

アクロポリスに屹立せし我は炎天 角博之 二〇二三年八月

泉句会は二〇二三年十二月解散となりました。

俳句鵒の会

発足年 二〇一四年十月

開講日 第一火曜日 午前
参加人数 十人

指導

鵒田智哉

ときた・ともや 昭和四十四（一九六九）年、千葉県生れ。平成八年「魚座」入会。終刊後十九年「雲」入会、退会後二十七年同人誌「オルガン」参加。句集に『こゑふたつ』『風と円柱』『エレメンツ』。第十六回俳句研究賞、第二十九回俳人協会新人賞、第六回田中裕明賞。

海苔の面に光のぶれをうつし見る 鵒田智哉

螢から真顔になつて戻りくる

きのふよりけふの守宮のあたらしき

かたくりの花蝶のごと空へ発つ 和智安江 二〇二二年四月

逃水のはるかむこうに逢いたき人 田本道江

朝寝して何もない日が始まりぬ 三由雅子 二〇二二年五月

蟻が蟻引きずつてゐし真昼どき 木下周子 二〇二二年六月

原色の映る運河や夜店市 松井宏文

ぞろぞろ蟻そろそろ街にもどろうか 伊狩七重

黒々と死のかたまりへ蟻の群 松浦恵美子

七夕やいとこのお兄ちゃん四国 矢野美智子 二〇二三年七月

午後四時の厨動かない蟋蟀 木下周子 二〇二三年十月

くつたりと折れ曲りたる芭蕉の葉 三由雅子

かちやかちやと家庭教師と夜食かな 矢野美智子 二〇二三年十一月

言ひつゝの子の息白くとがりたり 和智安江 二〇二三年十二月

鯛焼きの半身にあんのめり込みぬ 矢野美智子 二〇二三年一月

霜晴や溶け入りさうな朝の月 松浦恵美子

行合の霜ゆつくりと差す朝日 木下周子

海苔粗朶のつぶさに見えて着陸す 松井宏文 二〇二三年二月

水仙の苞につばみの透けて見ゆ 仁科祥子

日の当たる背中に春の来たりけり 仁科祥子

雛段を溢れても尚飾るなり 矢野美智子 二〇二三年三月

わつと出て木の芽のひとつひとつかな 矢野美智子

「老いてこそ美しくね」と木の芽かな 伊狩七重

こそばしき肩甲骨や木の芽晴れ 和智安江

空を突く花木蓮の白き芽や 田本道江

木の芽風母の散歩の長くなり 徳久あき

公魚のひらりきらりと二尾釣れり 徳久あき

ちのね俳句会

発足年 二〇一六年四月
開講日 第四火曜日 午後
参加人数 十人

指導 茅根知子

ちのね・ともこ 平成十(一九九八)年「魚座」入会、俳句を始める。
二〇〇一年 第十五回俳壇賞。「絵空」同人、俳人協会 会員。句集『眠るまで』『赤い金魚』。

合鍵の部屋に小さな冷蔵庫 茅根知子

冬蜂や線路は遠くまで光る

硬球が浮かんで秋のプールかな

苗句会

早起きのあずさ一号山笑う 佐藤とみ子 二〇二三年三月

夏つばめ三角屋根の駅舎かな 二〇二三年六月

信号無視紋白蝶自由奔放 山口汀子 二〇二二年四月

横顔の子規に似てます衣被 二〇二二年八月

高原に人待つ馬の目の涼し 浅野純子 二〇二二年七月

ありきたりといふありがたさ水を打つ 二〇二三年七月

星月夜不思議なことの起こりさう 山村笑流 二〇二三年八月

寅さんの線香花火のやうな恋 二〇二三年八月

別れ際糸のころ草にくすぐられ 谷口律子 二〇二二年八月

覚めやらぬ目に真青なる初御空 二〇二三年一月

新しい記憶は消える秋の空 紺野果倫 二〇二三年九月

老猫を抱いて流星さがす夜 二〇二二年十月

今朝の足落花の道を軽やかに 高木らら 二〇二三年四月

汕頭のハンカチ持ちて能楽堂 二〇二三年六月

山茶花のやさしからずや影もまた 柘植光代 二〇二三年十一月

立てかけし鏡を素足横切りぬ 二〇二三年七月

かき氷とける頃言ふ本音かな 小林佐江子 二〇二二年七月

トントんと渡る石橋冬ぬくし 二〇二三年十一月

発足年 二〇一七年四月
開講日 第三火曜日 午前
参加人数 十五人

指導 鶴岡加苗

つるおか・かなえ 昭和四十九（一九七四）年、広島県生れ。「香雨」同人、編集担当。俳人協会幹事。句集『青鳥』。第二回俳句四季新人賞、第三十八回俳人協会新人賞。

平積みの追悼号や若葉寒 鶴岡加苗

噴水のしぶき一番星に触れ

羽子板市ひとり娘をともしひて

暖かやぐづる子を抱き庭先へ 宇田川勝実 二〇二三年四月

湯気たてて粽ごろんと盆の上 瀬戸久美子 二〇二三年五月

過ぎし日の海の匂ひの夏帽子 角川真知子

赤べこの頭うんうんと梅雨寒し 高津美子 二〇二三年六月

六月の葉擦れや森の美術館 古川民江

人気無き校舎に鳴りぬ秋風鈴 春日満喜志 二〇二二年八月

秋風鈴短冊ゆれてコーヒーブレイク 高津美子

嫁せし子の吊るししままに秋風鈴 古川 運

通夜の客見送りにけり秋風鈴 丸山ゆき

むら雲を抜けて満月生まれけり 福井信子 二〇二二年九月

かまきりの風あるごとく身を揺らし 古川 運

風渡る黄金の稲穂波打ちて 春日満喜志 二〇二二年十月

窓一面のモザイク模様稲の秋 瀬戸久美子

玻璃越しにすこしひづみぬ冬紅葉 笹川玲子 二〇二二年十一月

菰巻の縄より雨の滴かな 世良明美 二〇二二年十一月

古書店のきしむ踏み台冬初め 吉見布美子

小春日や黒く光りて禰宜の杳 小山優子 二〇二二年十二月

祖母の手に小裂のはたき年の煤 笹川玲子

羽子つきや路地裏からの子らの声 宇田川勝実 二〇二三年一月

暮れゆけばさらに華やぎ羽子板市 重田春子

羽子板の銀の簪日を返す 世良明美

羽子板や舞ひ出でさうな藤娘 角川真知子

茶掛には「福寿」の墨書初点前 宮永民男

ゆつたりと鳶が輪を描く梅見かな 小山優子 二〇二三年二月

またちがふ鳥の声聞く梅見茶屋 重田春子

うぐひすを傍らに聞き遠く聞き 福井信子 二〇二三年三月

陽に風に子ら散らばりて青き踏む 古川民江

画紙へ置く墨のかをりや春の雪 丸山ゆき子

木を組みしのみ墓標や春の雪 宮永民男

春浅しひよこの眠る掌 吉見布美子

すなおな句会

発足年 二〇一九年四月
開講日 第一金曜日 午後
参加人数 十一人

指導 橋本 直

はしもと・すなお 昭和四十二（一九六七）年愛媛県生。俳句実作者かつ研究者。「豈」同人。現代俳句協会会員。神奈川大学高校生俳句大会予選選者。合同句集『水の星』『鬼』。第一句集『符録』

薬罐の水へろんと傾ぐ春の風邪

橋本 直

ヒエロニムス・ボス『快樂の園』より

雷雲をあれら身も世も無き肉界

狼の祭森から火の匂ふ

麗らかやつま物洗ふ湧水路

戸田年昭

二〇二二年四月

菖蒲湯にザブンと浸かる昼日なか

石澤久子

二〇二二年五月

道まがれば芭蕉巻葉の直立す

石澤久子

巻芭蕉解けて平和の世よ来たれ

博多信子

後家という言葉廃れて薄暑かな

博多信子

二〇二二年六月

太陽にフレア地球に競べ馬

赤坂奈緒

くらべ馬馬上に躍る勝負服

戸田年昭

さみどりを吸ひて駆けゆく競べ馬

春藤千恵

いつまでも眠らぬ街を行く白夜

福永泰子

二〇二二年七月

梅雨曇り風が甘いと三歳児

博多信子

とびきりの温湯に浸かる土用かな

角川賢二

夏ふかし薪割り終えて茶の支度

壽恵村晴夫

二〇二二年八月

天道虫回覧板に乗り来たる

吉井雅子

抜歯せし親不知の穴夏深し

角川賢二

茅蜩や遮光カーテン開け放つ

角川賢二

二〇二二年九月

気の強き手のり文鳥秋澄めり

吉井雅子

彼岸花国葬二つ見送りぬ

博多信子

二〇二二年十月

雀蛤となりて寄木の小物入れ

赤坂奈緒

秋うらら臓器提供承認す

赤坂奈緒

二〇二二年十一月

手を打って結んで開くいぼむしり

吉井雅子

御嶽の雲と遊びて秋の駒

角川賢二

女子会のシャンソンの宵初時雨

福永泰子

二〇二二年十二月

枯木立透けて静かに石灯籠

壽恵村晴夫

ほろほろと枯葉の積もる力石

伊賀まゆみ

鎌倉の海を渡れり除夜の鐘 伊賀まゆみ 二〇二三年一月

銭湯に朝湯のチラシ年始 石澤久子

初夢や衣(きぬ)の手触り残るのみ 赤坂奈緒

槌目清む雪平鍋や寒の水 春藤千恵

ホスピスの母に届けむ庭の梅 博多信子 二〇二三年二月

立春大吉ねまる仔牛の斑(ぶち)ハート 赤坂奈緒

ひな祭宿坊で飲む般若湯 戸田年昭 二〇二三年三月

雛壇の裏のくすくす笑ひかな 赤坂奈緒

対面句会と、ネット句会夏雲システムを併用。五句投句・七句選。
選句までを夏雲で完了させ、会場では各句の鑑賞や質問、ご指導や添削等していただく時間を充分とるようにしています。

対面句会に欠席しても選句まで参加でき、皆で楽しめる座となっています。

まどの会

発足年 二〇二〇年四月

開講日 第三土曜日 午前

参加人数 八人

指導 田島健一

たじま・けんいち 昭和四十八(一九七三)年、東京都生れ。「炎環」同人。
同人誌「豆の木」「オルガン」所属。句集『ただならぬぼ』。

降る雪の気配鼠の耳の色 田島健一

鼻うたは新しいうた春の虹

青鷺やひらくとそこにあるピアノ

筍や潜望鏡をちょこと出し 亀山和子

あくびする浴衣の娘爪化粧

八手の葉雨粒ぽつりぽつりかな

枯草の果てにねずみを葬りけり 大友麻理江

春や姉妹喧嘩のシュガートースト

飛花落花人と扉の廻りけり

ブロッコリー子どもの口にふわふわと 大塚 勇

悴むや楽器をたたく主夫バンド

列島の喜雨や降水帯の彩(いろ)

赤子蛆青虫そぞろにうごめく家 片岡真裕子

うきわ抱きただ波前に立ち尽くす

落ち葉さしさかなつれたと枝もつ手
夜店立つ鉄の舞ひし飴細工

生島 融

春の海ガレキとタンク静かなり
秋風や羊羹残し妻の逝く

若之の会

発足年 二〇二〇年四月
開講日 月一回休日に開催
参加人数 八人

指導 福田若之

ふくだ・わかゆき 平成三（一九九二）年、東京都生まれ。「群青」「オルガン」に参加。句集『自生地』『二つ折りにされた二枚の紙と二つの留め金』らなる一冊の蝶。第六回与謝蕪村賞新人賞。

雉が身を痛めて音の火を放つ 福田若之

七十路や秋思というふも面伏せ

壁に張りついて何やら言う金魚

朧夜や馴染みのバルの爪楊枝 吉原京子

日時計の南の余白ゆりかもめ

八寸に木の芽和えある七回忌

万緑やそつと触れてみる胎動 柴谷悦子

武蔵野に多の蕊たつ白桜 佐藤なつ

紫陽花や幾度読みしかこの頁

桃の花凸と凹とで五十年 ポックリの鈴に振り向く初戎 岡部義信

小三治の長き枕や敗戦忌 岩尾伎三江

尺の鱧破顔の父の肘叩く

佳日句会

発足年 二〇二一年四月
開講日 第三日曜日 午後
参加人数 十二人

担当
宮本佳世乃

みやもと・かよの 一九七四（昭和四十九）年、東京都生まれ。「炎環」
「オルガン」「豆の木」所属。句集『鳥飛ぶ仕組み』『三〇一号室』。第
三十五回現代俳句新人賞。

白蛇がわたしの部屋にゐる今年 宮本佳世乃

光りつつシャベルをすべる春の砂

日盛りの玻璃戸の奥の水の音

カタバミや横浜野毛の飲み屋街 小澤俊彦

一面のひまはり一念のいのり

喉 太 き 男 不 動 の 祭 唄 大本恵子

ドトールの二階静かに夏終る

木製のペーパーナイフ日脚伸ぶ 大矢聖子

幾千の鈴振るごとく大花野

身をしばる糸のほどけて夏祭 窪 龍子

夕闇に半袖白し秋の風

裸木や千の手広げ空を掃き 近藤俊子

葛切をすすり合ふ共犯者たち

ひまわりの丸く咲きたる明日に継ぐ 高城カツ子

夕闇に吞まれしままの茄子かな

女郎花根掘り葉掘りは聞かぬなり 田口直哉

冬の空プテラノドンの群れ見たり

たんぽぽや地面まくらに夢ごこち 西山八重子

白玉やふにゃふにゃ逃げるさじの先

沈丁花記憶にたどりつく名前 橋本めぐみ

バレンタインデー卵白ほどに軽き嘘

卒業のアルバム重し夜長かな 藤川久美子

母もそういつも一人の草むしり

安里句会

発足年 二〇二一年四月
投句締切日 第四土曜日
参加人数 十一人

指導
安里琉太

あさと・りゅうた 平成六（一九九四）年、沖縄県生れ。「銀化」「群青」
「澁」同人。句集『式日』。第四十四回俳人協会新人賞。

苗木市雨はしづかに地を叩き 安里琉太

納棺師沈丁に肩濡れて立つ

遅き日や釣れて長靴蛸の棲む

親指にひらく小魚花の冷え 荒山洋子

暮るる日に牡丹おほきく緩みけり 岸上みち枝

小満や手触りの良き束子買ふ 杉本典子

夏帯の淡き思ひをもてあます 岩石むそむ

梔子の花見えねども豊かな夜 小山茂

青山椒何やらニユース騒がしく 吉原京子

アロハシャツ風が通って膨らめり 内藤浩美

稲穂波ソーラーパネル光りをり 渡邊文雄

枝に蒂残し熟柿の落ちにけり 齋藤雅一

何処までも風の墓地靴に石 河合信之

柳元句会

発足年 二〇二一年四月
開講日 第二土曜日 午前
参加人数 十一人

指導
柳元佑太

やなぎもと・ゆうた 平成十（一九九八）年、北海道生れ。「澤」同人。
短詩系ブログ「帝」に参加。第二十三回山本健吉評論賞。

屋根裏を黴統治しめす天球儀 柳元佑太

思考することの涼しさ禽の羽根

鶴童子渚を宙吊りに逍遙く

高き背を持てあましおり受験生 岸上みち枝

地方紙の見開きの隅春の山 杉本典子

黄砂降るかもるに遺影並ぶれば 荒山洋子

花馬酔木陽の色の房広げたる 小出美樹

目借時番台の婆生きとるか 河合信之

花は葉に機嫌よろしき洗濯機 岩石むそむ

取り囲み叫びて神輿ひよいと浮く 大熊光汰

友涼し勝ち碁に笑顔負けもさう 渡邊文雄

母の札取れて寂しき三が日 小山茂

鴨の会

発足年 二〇二二年四月

開講日 第三日曜 午後

参加人数 十三人

指導
西村麒麟

にしむら・きりん 昭和五十八（一九八三）年大阪生れ、尾道育ち。俳句結社「麒麟」主宰、「古志」同人。句集に「鶉」「鴨」。第一回石田波郷新人賞、第五回田中裕明賞、第七回北斗賞、第六十五回角川俳句賞。

朝までは鶯餅がゐたる皿 西村麒麟

赤椿その一輪の声が漏れ

紫陽花やいきいき病んでゐたる人

雨降のラヂオの午後のところてん

ふうっと吹き廻り始める風車 瀬下純子

紫陽花の蕾いまだに青々と

早朝の賽銭箱に祈り虫 津田麻紀子

色わけきっちり花種を小袋へ 有馬歌子

りんごのほっぺの少女よ鎌鼬 声出して我が句ころがす春ごたつ 向山泰子

筍やごとりとごとりと大鍋に 川少しにごりて昏し夏柳

夏燕忘れたきこと二つ三つ 永らへて君と来し野に吾亦紅 村上恵子

穴まどひ門をまつすぐ入り来て 小春日やりウマチの手のペン走る

桜井恵子

種袋イタリア野菜真ん中に 樫山紀子

小鳥来て残り少ないカレンダー

涅槃図に亡き白犬を見ついたり 渡辺貴子
腹の子の小さきさくりや日雷

二〇二三年度

やさしい俳句講座

発足年 二〇二三年四月
開講日 第一土曜日 午前
参加人数 十六人

指導 中西亮太

なかにし・りょうた 平成四（一九九二）年、石川県生れ。「円座」（同人）
「秋草」「麒麟」所属。句集に『木賊抄』。

蛇穴に入りて豆腐の花がつを 中西亮太

すたすたと来てちよろちよろと煤払ふ

思ふことありし蛇穴に入るなり 篠智恵子

ちりとりに箒寄り添ふ秋日和 塩谷博史

涅槃図を顔ちかづけて見てをりぬ

秋冷や犬の匂ひのあたたかさ 高橋明夫

水瓶すいびやうの竜の眼碧し星冴ゆる 槇枝聖子

緑さす足は黄金の小花蜂 和田孝子

のみぐすり数を競うて旅始 千葉直美

つぎつぎと脇擦り抜けし夏帽子 坂井照弓

蠟梅や光の中に黄をほどき 金井多計子

空気ごと潜る故郷の茅の輪かな 齋藤雅一

石庭の流れは消えず雪涅槃 伏木陽子

落雷や業平の恋は実らず 木佐淳子

流水やあはきみづいろ砂糖菓子 村瀬ヒデ

帰省して友と会ふ日の踊りかな 滝口美智子

春風や五分遅れの三鷹行き 志摩久美子

献花する人の長影あきあかね 渡邊昭子

講座終了とともに、二〇二三年四月より「中る句会」として継続活動しています。

初回は俳句を作ってみよう。二回目は大田黒公園へ吟行。三回目は句会。仕上げに、お気に入りの句を短冊に書きました。

小学生のための子供俳句教室

講師 中西亮太

二〇二三年

第一回六月二十四日

第二回七月二十二日

第三回八月十九日

東京の川の名言へず白桔梗 中西亮太

夏の池目立ち大きい金のこい 丹羽紗結里

夏休みルアー投たらドラグなる 東 たいち

じりじりとせみがのたうつなつかい なんぶかい

夏休み時をわすれて遊びすぎ 大久保圭

青しばやふかふかしているきもちいい 阿部 悠



角川庭園開園十五周年俳句大会

投句期間 二〇二三年五月一日～六月三十日

表彰式 二〇二三年十月二十九日 角川庭園詩歌館まつり

優秀賞の発表

選者特選賞

鴫田智哉選

びろびろとアロハ煽りて風の行く

田村裕子

阪西敦子選

緑蔭を中へ外へと芝手入れ

永井恒子

鎌田俊選

恐竜も診ますと獣医青嵐

齊藤保志

高柳克弘選

カラオケのドアから漏るる卒業歌

潮見 悠

入賞作品

大賞

(鎌田俊準特選 鵜田智哉優秀句 高柳克弘優秀句)

白玉や娘と語る妻のこと

齋藤雅一

大田黒公園賞

(鵜田智哉準特選 高柳克弘優秀句)

昔日の校歌のかたち雲の峰

豊島月舟斎

杉並区俳句連盟賞

(高柳克弘準特選 鵜田智哉優秀句)

スーパ―の少し冷たい桜もち

竹内静江

(阪西敦子準特選 鎌田俊優秀句)

梅雨晴れのアヒルボートの胸に数

塚本桜魚

すぎなみ詩歌館賞

(阪西敦子準特選・鎌田俊優秀句)

蒲公英やもう何も欲しがらぬ猫

紺野果倫

(鎌田俊準特選・阪西敦子優秀句)

春愁やふるえて走りだすバスは

竹ノ内ひとみ

特選

びろびろとアロハ煽りて風の行く

田村裕子

準特選

歌の名を由来に長閑なるわたし

山本たくみ

歌を追ふ冷たき指のありにけり

矢野美智子

一つ家に時差ある暮し桜餅

近田薄氷

坂道で子の手は離れ冬紅葉

原田晴美

昔日の校歌のかたち雲の峰

豊島月舟斎

ばさばさでも、はたはたでもない。びろびろ、が絶妙。肌から生地が離れて震えるさまが、ありありと感じられる。けっこう強い風だろう。風、を主語にしたことで、アロハシャツの様子だけが浮き彫りになるのもいい。

由来、という言葉に、私はゆかしさを覚える。何という名の歌なのだろうと。もしかすると、わたし、の名がノドカさんなのかもしれないけれど。そんな想像も含め、歌、というものに導かれる穏やかな心が伝わってくる。

人差し指で、歌、の音符を追っているのだろう。歌、が紡ぎ出す時間に沿い、指、は横へ滑ってゆく。もとより音符と歌とは別のものであるけれど、その間を繋ぐのがこの、ひとりでに滑っていく、冷たい指、なのだろう。

一つ家、にいながら、一人ひとりに仕事や、学校や、家のことといった時間割が違っている。ある日その家に、桜餅、が介在した。家族一人ひとりの心にともっている明かりのように、桜餅、がほんのりと優しい。

私は、上り坂のような気がした。それまで手を繋いで一緒に歩いてきた、子、が不意に何かを見つけて、一人で先へと歩き出したのではないだろうか。子、はいつか離れていく。冬紅葉、の淋しさと温かみが心に残る。

昔日、とあるから、ずっと前の、思い出の校歌だろう。校歌、とその頃の自分の生を思うと、象徴的に、雲の峰、がイメージとして立ちあがるのではないだろうか。そしてそれが、この人にとっての、校歌のかたち、なのだ。

優秀句

暗号を「受信巾」です蝸牛

小山泰子

立体の渋谷に迷ふ春の風

山口明子

炎熱やサンバを踊るへそとへそ

滝田光雄

遠くまで飲みに行くなり秋日和

高橋明夫

オルガンの尾を引く音色春愁ひ

加藤悦子

歌を吐く汗はマイクに伝わって

伊藤菖蒲

恋文はA Iの作虎が雨

富永志保子

君が代を歌ふ異国のラガーマン

松井宏文

スーパ一の少し冷たい桜もち

竹内静江

子の名前薄れし鞋や大夏野

田中有楽

鼻歌の背泳ぎすこしづつ曲り

前田 拓

紫陽花の歌声じつと聞いている

田口直哉

轢かれ裂けパイロンさらに朱い秋

株高利之

順を待つ手の白菊の確かなり

大友まりえ

二人居に掌ほどの鏡餅

早坂洋子

白玉や娘と語る妻のこと

齋藤雅一

松葉杖を置いて一歩や愛鳥日

山本和子

曝す書に師の鉛筆のありありと

牧やすこ

もつれあふ糸のほぐれず星の歌

松井宏文

美術展窓を外して搬出す

丹沢借景

特選

緑蔭を中へ外へと芝手入れ

永井恒子

準特選

蒲公英やもう何も欲しがらぬ猫

紺野果倫

新茶汲む奥の急須を出しにけり

野村宣子

梅雨晴れのアヒルボートの胸に数

塚本桜魚

立春のスリッパ脱げる記念館

山口汀子

草むしり土偶のごとく休息す

松浦道夫

樹下に広がる芝の手入れは、暑い日も、いや草も成長の早い季節こそ欠かすことはできない。日の下に出たり、緑蔭に体の端を染めたり、不規則に緑蔭を出入りしながら、時に涼み時に涼しさを手放しつつ続く手入れ。

老猫、あるいは病気だろうか、その性に反して、もう何かをねだることもなく、衰弱した猫なのである。蒲公英は今、猫を包むのか、思い出の中にあるのか。低い黄色の花が、猫のかすかな希望をあたたかく包む。

新茶を淹れるときの、何気ない動作を描いた。香りや味はもちろん、目にも美しい新茶を、間違ひなく入れるために、奥にしまつてあつた普段は使わない急須を出す。その動作も含んだ新茶の心浮き立つ様子。

アヒルボートの数字は、今、急に書かれたものではないだろう。梅雨の間、あまり目を向けて来ず、あるいは出番がなくてしまわれていたボートを久しく見て、ふと気づいた感慨。アヒルのほうも何か漲っているようだ。

厳しい冬が一応の終わりを迎え、これから明るくなつていく最初の一日。その逸る気持ち、または安堵のためだろうか。記念館という少しきちんとした場所のスリッパに起こるほつれが、また春の気持ちに沿う。

夏にこそ草は成長し、その季節にこそ必要な草むしりだが、その逃げ場のない暑さはどうしようもない。「土偶のごとく」という大胆な比喩が表す、うずくまる姿勢、半眼、動きの少なさに宿るおかしみ。

優秀句

アイリスの一茎折れて雨あがる

渡邊昭子

朴散華人の恋路を見てしまふ

岡本葉子

アルバムのスカート白き桜桃忌

國田鮭児

夕顔のひらきて話す人もなく

貫井知子

いつのまにクロッカスの芽のあかるさよ

山口汀子

冷房の遠くて耳飾りふんわり

竹ノ内ひとみ

海染める入日へ鳶の冬至かな

木田和子

遠くまで飲みに行くなり秋日和

高橋明夫

エプロンをきりり締め上げ朝曇

春彩

夏の川歌碑は一文字欠けている

伊藤菖蒲

炎熱やサンバを踊るへそとへそ

滝田光雄

犬小屋の片付けられし夏木陰

山内禎祐

きのふよりけふの深さや木下闇

竹之内京子

初雪や試し書きするボールペン

平野恭子

鍵盤の小指に終はる卒業歌

前田 拓

大鍋に年越蕎麦の滾りけり

大本恵子

春愁やふるえて走りだすバスは

竹ノ内ひとみ

微かなる夫の鼻歌胡瓜もみ

平野恭子

立葵ふらり立ち寄るよその猫

紺野果倫

絨毯の毛足に沈む歌留多かな

潮見 悠

特 選

恐竜も診ますと獣医青嵐 齊藤保志

恐竜は、白亜紀に絶滅した爬虫類の総称なので、爬虫類を扱う獣医からすれば、診察の対象となりうるのだらう。窓外の青葉が強い風に吹かれている。病院の噂を聞きつけた恐竜が受診に訪れたかのような気配が一句にただよう。

準特選

春愁やふるえて走りだすバスは 竹ノ内ひとみ

日が明るく心の浮き立つ春なのに、とらえどころのない憂いや哀しみを覚えることがある。日頃はなんとも思わないバスの走り出しの光景を捉えて、動力の伝達するさまに感じ入っている作者がいる。

ステテコの父は海馬に住みたまふ 小笠原黒兎

海馬は、記憶の司令塔とも言われる器官で、短期記憶から長期記憶へと情報をつなげる。夏の暑い盛りになると、ステテコ姿の父親を懐かしく思い起こすのだらう。記憶の中の父を、海馬に住んでいると表現している。

清明や産湯をはじく嬰の肌 田中みどり

嬰兒を抱いたよろこびを格調高い生命讃歌の一句にまとめている。清明は四月五日頃で、天地の気がすがすがしく満ちてくるときという。産湯で浄められた嬰の姿に、一種の聖性が宿る。

哲学を捨てて海月の透きとほる 小池とも子

哲学とは、これまでの人生経験に基づいた人生観や世界観、作者の理念であらう。海中を浮遊する透明な海月に、哲学に囚われない融通無碍の精神を感得した象徴詩である。

白玉や娘と語る妻のこと 齋藤雅一

夏の盛り、白玉の白さ、冷たい食感の涼味にふっと一息をつく。娘と話す内容は、おのずと妻の思い出に及ぶ。娘にとっては母親であるが、妻として母として語られる一人の女性のエピソードと、白玉の取り合わせが甘く切ない。

優秀句

アイリスの一茎折れて雨あがる

渡邊昭子

搾乳を待つ牛の目に二重虹

宮崎梅電

青胡桃旧家に男児をのこ誕生す

朝倉さき子

台風と一夜の酒を酌み交す

善如寺陽子

秋の風馬の横腹あたたかし

竹内静江

梅雨晴れのアヒルボートの胸に数

塚本桜魚

甘酒や生き長らえて百一歳

山村笑流

春めくやシャンプーあとの蒸しタオル

藤田正子

オルガンの尾を引く音色春愁ひ

加藤悦子

人は皆誰ぞの子たりつくしんぼ

青木喜代江

柏餅明日が無限にあつたころ

近田薄氷

ひとりなら風喰う昼餉大花野

田中有楽

風かおる小鳥の歌も草も木も

坂井夫美子

蛍火やいまならごめんねと言へる

赤坂奈緒

画布に置く雲一刷毛や麦の秋

北原孝子

乳母車春のひかりを積んでいく

真田 正

蒲公英やもう何も欲しがらぬ猫

紺野果倫

葉桜やハミング洩るる保健室

大本伸彰

薫風や鬣編んで競技馬

荒井八千代

立ち漕ぎの少年限りなく夏へ

築山史子

特選

カラオケのドアから漏るる卒業歌

潮見 悠

卒業歌を体育館ではなく、カラオケで仲の良い友達と歌っているというのが新しい切り口。季語を更新した句にはやはりインパクトがある。

準特選

十六むさし恋のはじまりとはならず

宮崎久實

「ならず」と打ち消しているところで微笑が生まれる。幼い日の淡い思い出。

スーパーの少し冷たい桜もち

竹内静江

大量生産が当たり前になった時代の淋しさ。

新妻の名のほこらしき年賀状

早坂洋子

「ほこらしき」の直情的な表現がこの句では効いている。

夜学の灯消えて守衛の鍵の音

田中みどり

これからの秋の夜の深さが思われる。

支持率の折れ線グラフてふてふ来

生島 融

蝶の飛ぶさまをユニークに表現。不穏な政治状況への批評も。

優秀句

朝焼けの寒林をぬけ弓稽古

竹内静江

白木^{ムゲンファ}槿やなんと優しい朝だろう

朝倉さき子

紫陽花や言葉惜しまぬ人たらし

青木孝子

不眠はや七年けふも明易き

加藤柊介

アトリエにモデルの使ふ白日傘

小川明宏

万緑やスピードあげるハイウェイ

山田和子

弟にひとつもやらぬ歌留多かな

前田 拓

葦簀ごし披講の声の通りくる

牧やすこ

きのふよりけふの深さや木下闇

竹之内京子

花すぎの雨に動かぬ亀の首

原田伸介

莖立ちや三日つづきのとのぐもり

熊谷由美子

江ノ電に手を振る子らの夏帽子

広田妙子

さくらんぼルビーの指輪欲しかった

三上典子

昔日の校歌のかたち雲の峰

豊島月舟斎

たんぽぽや「さんぽ」歌へばもうおうち

赤坂奈緒

鳥歌い雨上がり知る立夏かな

川津景子

扉に狸お題狸と決まりけり

渡邊文雄

冬隣り食卓よぎる鳥の影

生島 融

鳥越の雨の祭の手締めかな

宮崎久實

白玉や娘と語る妻のこと

齋藤雅一

角川庭園開園十五周年記念俳句大会投句集

投句用紙（による投句）

初日の出ひとときわ目立つ赤い富士

新川松風

初詣で茅の輪くぐりて厄ばらい

五月雨に急ぎ帰巢のぬれツバメ

秋深し窓辺の月に君思う

木枯しに取り残したる柿一つ

松本純

ITの夢見る世とや猥枕

万象は波動と量子猫の恋

英字紙に包む鮫鰯謝肉祭

俎上にて河豚つぶやくにメントモリ

青木孝子

子守歌途切れ母子の夏座敷

朴散華彼の世の夫の相聞歌

卒業子晶子校歌を誇りとす

△紫陽花や言葉惜しまぬ人たらし

桑の実を頬張る思郷止みがたく

夏空へ弾む母校の応援歌

アリーナに国歌流れて夏始

鯊釣りし子の鼻歌は「北酒場」

加藤佑子

※投句の受付順に投句用紙、メール投句に分けて掲載しています。
（◎印は選者の特選句。○印は準特選句。△印は優秀句。重複した句には上位の印を付けています）

詩歌館十五周年花芭蕉

岬

何処から来たりし汝か春落葉

朴の花夕べを告げる区のチャイム

この一句和歌にするなら秋ともし

寒月や如何な影置く詩歌館

「赤い靴」歌う子どもら花吹雪

岡田弘子

さくらんぼ最上川の光のせてくる

電線は鳥の五線譜麦の秋

口ずさむ母さんの歌若葉風

サン格拉斯天使の顔に泣き黒子

子供の日ピッカピカの一年生

恒雄

こどもの日つぶあんこしあんどっち？

ガラス戸に柏あります子供の日

木漏れ日と陽炎乱舞大田黒

新緑と歌声弾む大田黒

初夏や木漏れ日の歌さやさと

おにぎりに日ざしさんさん子供の日

風光る水かげろうの歌やさし

ほの揺るるばら一輪や風の歌

坂井夫美子

△ 風かおる小鳥の歌も草も木も
腕ふるうセンス無しでも思い込め
ての平のぬくもりは飛び窓とじる
今生のこのぬくもりが真^{しん}二人^{ふたり}
目覚めると一番にするゴミ仕分け
アイツカラ代替ないよ今さらね
小手毬や風に吹かれてチアダンス
庭園の石仏柔和五月闇
居酒屋に活気戻りし朧かな
蒲公英や疫病下でも絮飛ばす
若葉風青きテントをふき抜ける
来てみれば力をぬけと芒原
白梅のふあつと香り五七五
大きくも小さくもなる石鯀玉
春めくやシャンプーあとの蒸しタオル
友からの便りのやうに燕来る
義母からのたけのこの山食べきれぬ
青梅道人と新緑まざる初夏
プールより見えし青空白き雲
波頭は光輝く水中花
熱波来て微かな蕾慌て咲く
新緑の水面に映えるコウノトリ
水若葉緑背ひて物思ふ
かしわ餅葉の香に思う初節句

東香

大河士道

藤田正子

高山瑤

石田憲

遺伝子

△ 水しぶきプールに響く子らの声
鯉のぼり少子化の中希少種に
風を切りプールの水面トンボ飛ぶ
きらきらと水はじけ飛ぶプールかな
△ エプロンをきりり締め上げ朝曇
土産買い帰り来る子の白き靴
川床のせせらぎ早しかじか鳴く
瀑布から白龍登るナイヤガラ
ソーダ水グラスに映す夏の海
搾乳を待つ牛の目に二重虹
万緑に吸ひ込まれたるティーショット
夏休発成田行搭乗券
西郷どんと甘藷焼酎ば飲まんとね
プールの底にデッキブラシのハーモニー
ノッカーの堅く軋みて走り梅雨
突然の豪雨湧き立つプールの児
司祭館満ち足りてゐる金魚かな
△ アルバムのスカート白き桜桃忌
教壇の声に張りあり柿若葉
合歓の花妻との誓い忘れたし
フェスを待つ列を揚羽が数えおり
肌近しプールに流れる恋の歌
蝙蝠のぴらぴらと舞う夕まぐれ
優曇華のかすかに揺れし宵の窓

春彩

宮崎梅電

谷中新樹

國田鮭児

鸚緑

自転車を追いつ越し香る茉莉花よ
縁日の海酸漿をねだりたる
カーネーション一本を選ぶこどもの目
汗共に市民マラソン四年ぶり

杉瀨明子

夏掛けをはみ出し足のすつきりと
ピリリりり市民プールは一斉休憩
ベビーカー押す母に添う白シャツ男児
入道雲期末考査の窓の外
陽炎や逆あがりできた日の記憶
蚊の羽音言うべきことをふと忘れ
彼岸花秘めたることは秘しまま
あの家は老人二人雪二尺
路地の奥演歌のさびや夜這星
庭園に忍ぶ昭和を沙羅の花
和室の過去に初夏の歌詞を詠む
菖蒲つんつん数寄屋造りを歌うよう
芭蕉巻葉つと歌姫になつてみる
永らえて園に昭和の夏めぐる
母の日や置き傘一本派手にする
前を行く若き俳人今年竹
地味な花つけ羊蹄や伸び上がる
摘む子等の声裏返る苜蓿
あけぼのの空色アンネの薔薇さうび
花吹雪満ち満ち満ちる目黒川

井ノ部酔舟

荒木洋子

岡崎志昂

清水淑子

ありし日の友と語りし春惜しむ
道路わき手向けた花に蝶止まる
受話器から訃報ひびくや砂乾風
藍染めのまだ着ぬ浴衣母の品
肩を組み寮歌を唄ひ黒ビール

木下周子

歌詠みの名は知らねども草むしり
難関の課題の歌曲大試験
雲海に影の映りし鳥の群
がらんだうの声炎天の白昼夢
分かち無く老若男女歌はじめ
怨霊を定家恐れし歌歌留多
虚子の妻鞍馬天狗の春惜しむ
耳許で雌の蚊歌ふラの音程
道真忌同じ文字無きいろは歌
青光る蜥蜴くるりと草叢へ
切通し天に緑と空の青
今朝咲いた子の顔程の押し木薔薇
走っても走っても逃げ夏の山
指広げ陽にべつたりと蜥蜴伏す
人生はお手付きばかり歌加留多
寝釈迦似や造りかけなるモアイ像
歌声はおばちゃん天使聖五月
音立てぬオスプレイかと黒揚羽
流星や歌舞伎役者は飛び六方

堀口泰司

笹本礼子

林璋

△ 炎熱やサンバを踊るへそとへそ
滝田光雄

夏めきて白ティシャツにスニーカー
立山を背に鯰しゃぶの雪見鍋
春の夜の髪梳く女の影絵かな
王台に選びし蜂の摩訶不思議
新茶まで待ちきれなくて最中割る
もう少し熱めがいいな、新茶殿
手塚崇

△ マスク外し初夏のシェーバー新しく
風鈴が鳴るコロナ明けクラス会
潮騒が無言歌の駅桜散る
柏餅明日が無限にあったころ
近田薄氷

○ 向日葵やあれこれそれで解かる人
若草の萌ゆる匂ひやまだ傘寿
禅問答妻としてゐる子猫かな
一つ家に時差ある暮し桜餅
ギムレット浴衣の君は目で合図
野口久美子

洞窟の育む清酒青葉風
厨より鼻歌今宵薪能
朝市の不揃いがいい路地胡瓜
巫女の指千の蛸を放ち終ゆ
刀身に銘刻む音牙返る
すかんぼの畦に唱歌を口ずさみ
橋本澄子

逝く秋や女語りの平家琵琶
幻と戯の苦闘を見しか百日紅
真理が居てこそ人脈花野かな
菅野兜哲

切れ字なく幻戯山房曼珠沙華
歌う藝幻戯山房人簇簇
逆縁に幻戯山房なる味方
海の日や歩き出しそな足裏跡
五千歩の一步を止めて小判草
善如寺陽子

△ 一着の恋物語更衣
働く事今日はここまで竜天に
台風と一夜の酒を酌み交す
源義忌水琴窟の歌かすか
小森谷栄子

芭蕉立つ幻戯山房歌まなぶ
歌俳句詠人の庭すすきかな
薫風やわが学び家の詩歌館
詩歌館句会の最中雷鳴が
再生の壮気を徴す青芭蕉
石井清

伏甕の水音絶つまじ朴の花
水琴の音色励みに鉦叩
歌詠みのところへ靡く夕芒
釜の湯の氣息ととのふ実南天
桜散る風にまかせる吹きだまり
戸田宮子

頑張れど老いには勝てぬ羽抜鶏
遠雷や父の面影遠くなり

散歩道接種会場初夏の風
紫陽花や料理教室友の顔
亀鳴くや歌をうたへぬ寂しさを

小川明宏

△ 大江山生野の道に落し文
アトリエにモデルの使ふ白日傘
梅雨寒や夜更けに雲呑吸りをり
カンナ赫火照しままに白む夜
帰還兵の空港ピアノ白夜かな

太郎

蛙うたふ田んぼなりしよ此方らみな
河童忌や人数足らぬ串団子
花好きの母の棺へ花の雨

青木喜代江

△ 人は皆誰ぞの子たりつくしんぼ
野仏の紅色ピアス櫻散る
夏座敷硯の海を渡る風
紫荊平安貴族の歌合
コロナ怖^おじめいめい膳をはこぶ夏

苗村百合子

白魚が切り開くかやわが乳房
首投げをきめて落ちるや初相撲
今朝ひとつ木瓜の花見ゆ遠目にも
送り火に声あげつ手をたたく子等
○ 新妻の名のほこらしき年賀状
△ 二人居に掌ほどの鏡餅
母よりも父の思ひ出冬至風呂

早坂洋子

長生きを諾ひ合へる初電話
皓皓と嬬歌の山の冬の月
まひまひつぶり母はひねもす座しをりぬ

山本和子

△ 松葉杖を置いて一步や愛鳥日
百舌鳥なくや地上は電波障害中
男には話しても無駄蜜柑焼く
ごみ収集の手ぎは手さばき男梅雨
泰山木の若木真白き炎^{ほむら}得る
手水舎の水脈々と濃あぢさる

齊藤保志

◎ 寄りあふも離れ揺るるも七変化
滝浴びて身内にどどと充つるもの
恐竜も診ますと獣医青嵐

佐藤稲子

クロツカス手あそび歌が石椅子に
水琴窟遠く聴こゆる夏帽子
ロープワークてふ剪定の男足袋
秋橙や石苔を食む鯉のひげ
帚跡そのままありぬ萩の花
芹なづな刻みつ歌ふ母の朝

大川千草

武蔵野の大地持ち上げ露の臺
麦踏やここは関東ローム層
天と地をあまねく払ふ五月富士
噴水の空掴むかに立ち上る
冬ぬくし山河五彩の色の無し
二所帯の垣根は低き沈丁花

佐々木利正

栗の花丹波三代農を継ぐ

古代蓮時空越えたる花の笑み

鑑定士気取りでうんちくぼろの市

青胡桃旧家に男児誕生す

発熱の児のいま寝入りをり短き夜

少年に薄き翅あり聖五月

夏の子やそろつて靴き脚持てり

白木槿やなんと優しい朝だろう

麦の秋「ひるのいこい」の昭和歌

春の風鼻歌もでてペダル漕ぐ

寒暖に振りまはされて四月尽

燕来た田のそちこちの耕運機

一月の家計簿新たピザ頼む

若葉風七十違いが手をつなぐ

新緑や幼児のリユックぶらさがり

夏めくや樹木葬にビールあり

鳥歌い伴奏始める若葉風

乳母車双子の脚に夏来る

齒科の窓白びつしりと山法師

芥子坊主胸つき坂の端にゆれ

二つかみ車中に受くる莢豌豆

すそ分けと子の取り出せる鯉かな

黒南風へ鶴の鋭き声ひびきけり

春の月湯浴みの手あし冷むるほど

朝倉さき子

柴和子

高津美子

桔梗純

熊谷由美子

△ 茎立ちや三日つづきのとのぐもり

美濃箋をあれこれ購ふて梅雨入りかな

うつそりと手あし長き子墓洗ふ

亀鳴くと祖母の頃より谷戸住まひ

青葉風父の寄贈の歌集かな

夏怒濤をんな四人のアーシング

里親の元へ子猫よ柿若葉

△ 朴散華人の恋路を見てしまふ

都電揺れ尾久八幡の夜涼の灯

新緑に光る制服自転車こぐ

緑道を孫の背追う鯉のぼり

ピンポンと孫が差しだすカーネーション

十葉は空家の花壇我が物顔

すずらの咲く日に合わせきつぷかう

歌合星座は夏に傾きぬ

微笑みの玉解く芭蕉大倭

小判草揺らし心を高鳴らす

地球再生しづかに示す黒揚羽

「大地讃頌」歌湧きあがる青葉闇

番という絆のありて群の鴨

有明の発車のベルや桐の花

梅雨晴間億光年の星光る

空家の拓榴の花は雨に落ち

地下鉄の昇り階段天の川

岡本葉子

森本康子

太田裕子

高橋實

○新茶汲む奥の急須を出しにけり
野村宣子

里山のあまたあらたし藤の花
新茶汲む二、三人でも独りでも
プチ家出したことも無し秋刀魚食ふ
枯枝やドドドンと来る新時代

山村笑流

△甘酒や生き長らえて百一歳

小声にて「青い山脈」端居かな
たらちねの母微笑みぬ律の風
冬富士やわが故郷は歌枕
落ちてなお形くずさぬ椿花

淀川青しん

輝く瞳指さす先に花芭蕉
街の角まがると広がるいわし雲
「河」の会何時まで見てた百日紅
梅の香や茶室にとどく水の琴

平田順子

亀鳴くや水琴窟の澄める音
石楠花の真紅に染まる詩歌館
神います泰山木や花一つ
歌声は天女の声か朴の花

若林弘則

雪に伏し日に立ち上がる枯尾花
雨蛙その位まで何故飛べぬ
靄深き古刹の縁の雨蛙
雨蛙田圃の中の一軒家
紫陽花は寺の一山崩すなり

白四肥まえに手打の白暖簾
いつせいに薔薇開きたる日和かな
貫井知子

△夕顔のひらきて話す人もなく

苗植ゑて爪に浸みたるレタスの香
出ぬ歌詞をふと口ずさむ大花野
酒のあて和へていたためて父本気
鶯の歌い上手を連れ歩く

小山泰子

△暗号を「受信」中」です蝸牛

少年の不意の側転枯野原
森恒之

地の穴へ工事夫叫ぶ師走かな
捨臼の半ば埋もれ路のたう
鋼鉄のアテネ戦士や冴返る
橋陰に少年歌ふ晩夏かな

福田澄代

△三線の島歌響く夏の海

兄弟の膝を揃へて歌留多取
流鏑馬や黒髪長き乙女射手
満心に生き抜く力羽化の蟬
空つぼのはな子の象舎夏の蝶

荒井八千代

△薫風や鬘編んで競技馬

絹商人越えし丘陵椎若葉
蛭烏賊明けの港に瞬けり

△

沙羅咲くや慰霊の琴の奏づれり
入母屋の軒にそよげり小判草
三十一文字美しき詠草濃山吹
緑鳩を磯辺に待つや卯波立つ
遠近に郭公鳴けり塩の道
水芭蕉水音のこし霧に消ゆ
御手洗に野の花いけて風涼し
眼鏡置き突く歌人の欠氷
夏フェスに親子三代サザンかな
子蟪蛄乗る葉裏には蛻皮
象虫に斧を弾かれ子蟪蛄
朴咲くや天へ詩魂のかぎりなし
泰山木の花よ再び詩歌館
扉に狸お題狸と決まりけり
源義の愛でし萩窪朴咲けり
天上へひとすぢの道朴の花
歌ふ児を茜に染める夕焼雲
ゆやけ雲歌ひながらの家路かな
老鶯の歌詠む声か切り通し
向日葵や歌の力は宇宙まで
扇風機だましましたも限界に
勝利の校歌ビール片手に諳ずる
自由席の隣人定め夏の旅
虎耳草と地域猫いる路地裏よ

萬代桂子

川村弘道

岩崎利晴

渡邊文雄

金山佐良子

高橋晴美

△

リフティング球は夕焼に吸い込まれ
赤松の幹の艶めく梅の雨
突然に言の葉誘ふ夜の噴水
画布に置く雲一刷毛や麦の秋
ゴスペルを届けむ沖の夕焼
ヴィオロンのラ・パロマきく朱夏のヒワ
初日の出老女うふふと駱駝の脊
鬼蓮の葉を押しくるは鯉の口
籐椅子に夫の脊のあと夕の風
車種当てをする子と歩く小春空
鍵盤のお星さま弾く小さき指
キーボードカエルの歌の小さき指
シンガーソングライター水琴窟の夏
秋うらら歌ひだしたる埴輪あり
虎楽笛地の歌となる秩父かな
ただひとつ母のゆづらぬ恋愛歌留多
悪童も未来を歌ひ卒業す
歌声も火の粉も空へキャンプファイヤー
木下闇歌を忘れた鳥の住む
歌声を掻き消すほどに驟雨くる
夏の宵路上の歌に足を止め
平凡な日々を祝うや花ふぶき
蒲公英やもう何も欲しがらぬ猫
夏の海BGMは昭和歌謡

北原孝子

石黒嘉子

藤本ミツ子

柘植光代

佐藤とみ子

紺野果倫

△立葵ふらり立ち寄るよその猫
冷房の歌声喫茶椅子堅し

山口汀子

白靴に銀座の疲れすこしつく
八月の記憶着替えをして正座
○立春のスリッパ脱げる記念館
△いつのまにクロッカスの芽のあかるさよ

早出和子

シャンソンの恋歌に涙返らぬ日
ゴスペルの歌もれる窓蔭からむ
湿り葉の下に十葉根の長し
梅雨晴れ間梅の実ぼとり酔い香り
母の日に「白妙え」咲きしその白さ
芭蕉像梅雨の船出か小名木川
紅一点ざくろの花を差す師匠
母想ふ素朴な味の浅蜷めし
一万歩梅雨の深川散策す
玉解きし芭蕉輝く江戸の土
芭蕉葉に蜜滴るや蜂謡う

久保隆美

眞貝忠一

スズメバチひと刺し腿の紅に
ホトトギス水天一碧歌翔けた
春雷にダルマインコが競う歌
大ケヤキ定家葛や纏い立つ
医者いらず季節丸ごと赤スープ
ピツと鳴きバサツと降り立つ黒い影
狭き庭あの世の死者かあげは蝶

佐藤マリ子

今日も又平和の鐘は夢の中
草木伸び小鳥伸び伸び遊び来る
めでたさやかみ切る力雑煮餅
しがみつきひざつく板の卯波かな

木田和子

△海染める入日へ鳶の冬至かな
北の地よりGLAYの歌や夏はじめ
竹林の雪解の水やざわめけり
春寒やガレのランプの灯を点す
雨あがり梅の花芯にひかる粒

山口明子

△立体の渋谷に迷ふ春の風
泰山木花は主を覚えしか
シャボン玉弾けて遠く陽の欠片
夏めくや踵を踏みしスニーカー
△オルガンの尾を引く音色春愁ひ
秋日和図書館書架に隙間あり
唱にある卵の花と棲む農園主
弾けぬ児を歌で支える初練習
テレビから歌声だけ聴く梅雨の明け

加藤悦子

矢野保

歌の径忘れな草を見る季や
忘れいし歌の響きや花カンナ
バナナの葉に青大将の子ども来ぬ
きうり食みきゆつきゆつきゆうと歌ふなり

矢野美智子

青鷺の背中の生えてゐる浮州
なむなむと歌の音寄せて盃蘭盆会

○歌を追ふ冷たき指のありにけり
釣銭に昭和が居るとホツとする

株高利之

△轢かれ裂けパイロンさらに朱い秋
掌を浸す月光写真テント孔
カラスウリミイリミイラレハロウイン
縄文と見返り交わす幻戯坂

△たんぽぽや「さんぽ」歌へばもうおうち

赤坂奈緒

しやらしやらと水琴窟に秋燕忌
芭蕉巻葉野点の背筋真直ぐなる
螢火やいまならごめんねと言へる

△芭蕉巻葉娘青年連れきたる
水に立つ尾羽根くるつと鴨の顔
木屋や縄文土器を作りし手

山口美智子

人類のはじめての声歌ならむ
梅酒提げ日暮の道を帰りけり
篁の風のすがしき夏あざみ

吉田武子

麦秋を来る人を待ち香を燻く
緑陰に新入の子等音合せ
湖の風を手を受け本諸子
残る暑さみそ汁飲んで背をのぼす

竹内静江

△スーパ―の少し冷たい桜もち
朝焼けの寒林をぬけ弓稽古

△花の波人も小鳥もさんざめく
秋の風馬の横腹あたたかし

野内貴子

梅狩りしジュース作り待ち遠うし
子ら夢中ザリガニ釣り立夏来ぬに
梅雨晴れに大田黒庭青紅葉
鑑賞やすぎなみ詩歌を夏至の日に
立葵天に届けば梅雨明けた
路地裏より昭和悲歌^{エレジー}茄子の花

三上典子

△類杖に机の擦れ漱石忌
綿虫の即かず離れずふと消ゆる
さくらんぼルビーの指輪欲しかった

△小春空丸^{まある}い声で歌い合う

山田和子

△万緑やスピードあげるハイウェイ
夏に入るホースのしぶき陽をはじく
木道に残る湿りや水芭蕉
新らしき鼓動高まる春惜しむ

山田恵子

ホンモノクロネコヤマトにありがとう
金魚ばちホテイアオイが隠れみの
手を伸し足でさぐってゴーヤの子づる
とり仲間外交上手のカラスくる
梅の実をコロコロあそぶ地域猫
梅雨間の夜母逝き仰ぐ更待月
紫陽花の勢い届け母の許へ

泰之

LINEにて新緑の今臥す母へ
春驟雨路地裏喫茶で過ぐを待ち
地覆う雪空は澄む青二色の世
新緑や船頭の歌流れゆく

雅子

△

「らんまん」の歌をハミング夏の朝
組板に跳ねてパセリの微塵切り
枇杷熟れて鴉一粒取り落す
玉葱のつるりと剝けて光りけり
境内を紫紺で埋める四葩かな
かるの子を誘動したる警察官

富永志保子

恋文はA Iの作虎が雨
消しゴムで元に戻せぬ夏出水
今はもうきかれぬ唱歌春愁
子は各自違ふ道ゆく雲の峰

林孝子

色鳥や女子大前の騒音計
落ちてなほ色褪せぬまま紅椿
思春期のをの子は無口春深し
現実はそのまま受けよかたつむり
青もみじかげに絵を描く赤き鯉
静々と体が緑に染まりゆく
薫風に燕高く翻り
夏来たら白く眩しく傲然と
炎天に寺町僧の影も濃く
向かい風力に変へて鯉のぼり

貞治

黒須幸子

田中みどり

○夜学の灯消えて守衛の鍵の音

○ポケットに指輪しのばせ百千鳥

着膨れて詣づ如来や布一衣

大矢聖子

草いきれ浮かぶ垂れ目の笑顔かな
つらつらと想ふにまかせ青田風
じつとりと逃げ場のなくて蛇日和
春愁や猫の背骨をなぞつたり
春風に手をつなぐとき歌生まる

隅田川水面燐めき子守歌

藤本ミツ子

隅田川鷗ゆうらり子守歌

水川怜子

囁きて水琴窟に赤とんぼ

木漏れ日や戦後の記録終戦日

貴婦人の襟はフリルで白菖蒲

春隣パン屋の行列十三人

吉田哲二

短日や蛇腹楽器のタンゴの音

緋には緋の影のありけり花衣

花筏身を崩し水通しけり

みほとけの耳朶を垂らして春の山

汝らは夏至に生まれし蝶なるか

心太サラーリマンも押し出せり

飛び込めばプールの底に指サック

杜崎ひらく
塚本桜魚
佐藤一樹

てんとう虫抜け殻壊さぬように持ち
簾ふと揺れて向こうは見えぬまま
植木快

佐藤れもん

バス停に人並びたる梅雨入かな
鯉群れてあぎとう池に銀やんま
内田和子
梅雨の庭池の水音高なれり
竹落葉スタンウェイの細き足
竹林にヤマブキの実のつらなれり
緑陰の四阿一人想ひけり
花躑躅そつと指さき入れてみる
竹ノ内ひとみ
春愁やふるえて走りだすバスは
ブラウスの襟たつぷりとシクラメン

△ 冷房の遠くて耳飾りふんわり
うららかや雲のつうつとのび焼却炉
風薫る開放弦のギターリフ
村内狼頭
アジタートといふ名のダリア狂女の舞
夏フェスやサイドギターのカッティング
序破急を呼ぶ一笛や梅雨の明
源次郎の小鼓寂ぶる夏舞台
ひとところ時溜まりゆく蓮浮葉
内野義悠
白靴の踏み入る芝のさざなみす
よろめきの帰路を螢火匂ひたる
一人では点けぬテレビよ鈎忍
みなみかぜ水琴窟に鳩かすむ
Cメロのここが私の卒業歌
山本たくみ

歌声に泣きをひとさじ冷蔵庫
幾千の海月の夜を歌ひ初む
枕には硬くて低き肩夕焼

○ 歌の名を由来に長閑なるわたし
面白く干されし蛸や夏の空
小笠原黒兎

○ ステテコの父は海馬に住みたまふ
蟪蛄生まる音符の歌となるやうに
高田祥聖
金 秋 の 竈 に 火 雷 神
紋黄蝶飛ぶ空気をやはく挟みつつ
鳩白くなりゆく雨後の青芝に
人間は企鵝の仲間や百千鳥
○ 十六むさし恋のはじまりとはならず
宮崎久實
△ 鳥越の雨の祭の手締めかな
夏期講座でしか逢へない人のゐて
側転の少女横切る夏野かな
上歌の音外したり蚯蚓鳴く
夏至真昼竹林音をひそめたる
団藤みち子
明治帝小休止碑や花は葉に
宿浴衣外湯の風を娛しみぬ
青葉闇バイク一台吐き出せる
すぐ終る墓参の旅や額の花

初鰹かかへもちたる腕かな
コンロもて蚊遣点けたるとき屈む

加藤終介

落葉松も新樹山櫻も新樹

△不眠はや七年けふも明易き

夏朝日赤塗の壁赫くなる

△弟にひとつもやらぬ歌留多かな

前田拓

△鼻歌の背泳ぎすこしづつ曲り

加湿器の置かれし歌手の楽屋かな

父と子の同じ校歌や初鰹

△鍵盤の小指に終はる卒業歌

凌霄花や足音混せて女どち

寺澤佐和子

星涼し人さし指のピチカート

原稿に散る読点よ太宰の忌

日雀鳴く電気ポットは湯気を吹く

己が影寄せ夏蝶の憩ひけり

句敵とすれ違ひたり若葉寒

吉田林檎

団子虫探しあてたり半ズボン

老鶯や木漏れ日の瞬く川へ

口角を上げよ大南風を受けよ

紫の錆びて薄紅額の花

煮繭場緒は稲穂にて取りしとか

裕良可

現生と隠世隔つ古簾

あの夏の復員伝ふ古行李

夏席や太夫床本練るでなく

白杖も交へ阿波行く夏遍路
桜蕊ふるやかそけき手鞠歌

野村茶鳥

樹氷林スピーカーから数へ歌

強霜の野にどこまでも子守歌

替へ歌の主語は愛犬罌粟の花

ひしめいて歌ふそぶりの水母かな

萩窪は住みよき街よ小鳥来る

尾沢久美子

昼の灯や教会通り初時雨

切株の椅子にぼつりと雪だるま

玉解きし芭蕉誘なふ幻戯館

空のはし捉へて朴の咲きにけり

雷鳥をそつと見つめた霧の中

二階堂照江

畦道を追いかけて廻すホテルの夜

桜舞ふ侍ジャパン世界一

アンネのバラ色変りて香り舞ふ

くしぶち美寿子

焙煎の香り漂よう麦茶かな

手作りの我が夏帽子出番待ち

初夏の街異国のごとく異邦人

萱沼智子

母の日の空の青さよ母の歌

蜘蛛の囀を払ふても払ふても

若草やそよ風受けてドミノかな

宗澤昭子

生垣を通り抜けゆく若葉風

越冬のベコニアの赤いとおしや

こいのぼり風にふかれて天高く

谷津一子

メール（による投句）

ほけの花小さな鉢で自慢顔
窓開けて新緑の木々さわやかに
空豆や綿の布団にくるまれて
三年ぶり遠出で会った富士桜
絵本の如葉先に向かふ天道虫
家の前孫達の声ソーダー水
鯉のぼり猫追ひ掛ける孫を追ふ
薔薇眺め思ひ出唄ふ老夫婦
秋風や水琴窟のひとりごと
読みさしの「ロダンの首」や蚯蚓なく
玉といて大波小波青芭蕉
あしたへと出でし夕星源義忌

国井朝子

小野はる恵

伊藤強一

朧月夜悲しき明星寄り添うて
十五夜を控えて暗し半の月
芥子赫くかぜに揺蕩う帰り路
鯔の通う川の静けさ橋の影
忘れがたき肌の香を葛の花
そよ風の通り道小手毬揺れて
練り切りの細工見事や椿咲く
ため息を掬い上げたり冬北斗
花の朱を腹いっばいに柘榴の実

松本裕介

亀山和子

荻窪に詩歌館あり秋夕焼
十年余の春夏秋冬詩歌館
ふる里は麻布十番夏つばめ
△きのふよりけふの深さや木下闇
白蝶のすり抜けてゆく額の花
きかん気の少年挑む大夕立
だしぬけに鳴く声近し木下闇
夏座敷言われる前に膝崩す
稽古着の少年正座柿落葉
御詠歌に本堂涼し送り盆
カチューシャを皆で歌った秋の夜

竹之内京子

富田順子

いざ吸わん新芽の息吹身丈ほど
△花すぎの雨に動かぬ亀の首
三度めの断酒を宣す四月馬鹿
町裏の蕎麦屋に相撲番付表
拓郎の「落陽」歌ふ翁の日
山茶花や九九を唱ふる三歳の娘
月涼し露営の歌碑は苔むして
○昔日の校歌のかたち雲の峰
碑の焼けし歌よ兵士よ麦の秋

原田伸介

豊島月舟齋

輕鳧の子ら通り牧歌の六本木
鋭敏な手振りは剣と似て歌留多
鼻歌も混じる厨や粽結ふ

長嶺奈都子

風に耐へ垂るる実一つ枯芭蕉
石畳下り上りて紅椿
手水鉢護る地藏や石路の花
苔むす句碑や幻戯山房に梅
弘暁の水珠となる蜺舟

小宮まこと

花苺墓石のまざる野面積
川幅にあまる光や花すみれ
呼子鳥浦にせり出す化石層
ほととぎす畳の青き御影堂
斉唱は最初で最後卒業歌

小澤俊彦

歌うたひながら水まく館主かな
サヨナラの校歌斉唱雲の峰
源義の水琴窟の音涼し
じゅん春樹歴彦はるか破芭蕉
帰省中なみすけの顔を思い出す
馬面のモンタンが好き巴里祭
後から不意に耳打ち落葉かな

高山並介
鶴田伸太郎

ガルーダと南へ遊ぶ神の旅
最近どうよって顔の猫と春
春浅し言い出しかねて別れ道
咳しげきシェルターに歌ひそやかに

松井宏文

△もつれあふ糸のほぐれず星の歌
夏至祝ふ大地の歌や空真青
△君が代を歌ふ異国のラガーマン

久世寿

草摘むや口遊みある校歌かな
珈琲は飲みて香るや百合の花
物売りに鶯鳴きて声を掛け
春雷の朝日に祈る病みし我
楽しけれ遊びし孫に桜花散り
乙女らが賛美歌奏で百合の花
古酒持ちていにしえ人の春は逝く
咲くもよし桜の花は散るも良し
ヴィオロンのおたまじゃくしに歌を聴き
筈や月仰ぎ見しかぐや姫
農作業疲れて仰ぐ春の天
夏の夜手つなぎ輪唱した至福
母がまた本音を仕舞うおちよぽ口
夕焼空病室で聴く子守歌
じわじわとクラスまとまる合唱コン
かんたん人に人を愛せず紫陽花
小満の角川の庭甘露の雨
降る雨のまにまに煌めく梅雨の星
角庭は老若世人の奥座敷き
角庭は喜悲こもごもの癒す園
角庭は明けて15の奥座敷

早野雅粹居士

白熊左愉

金城明日美

宮原久雄

孤蓬

田島洋一

柴野アマリリス

牧やすこ

黒沢章子

五月晴れ句会盛んな詩歌館
荻窪のキャベツの花詩歌館
田植え歌水面に映る柏の宮
足袋のまち花手水にあめんぼう
花開く泰山木の壮麗さ
着納めの詰襟の聞く卒業歌
パソコンを閉じメーデー歌眩きぬ
昼飲みやそよとも動かぬ鯉幟
春闇に至福の放尿して孤独
行く春や傘傾げあひすれ違ふ
宝塚歌劇真似たるアマリリス
朝涼の始発を待つて歌舞伎町
縦笛の校歌を吹いて夏休み
恋の札ばかり欲しくて歌留多かな
歌舞伎座の噂あれこれソーダ水
薫風や小さき庭から鳥の歌
野茨の咲くや古りたる句碑ひとつ
曝す書に師の鉛筆のありありと
葦簀ごし披講の声の通りくる
手になじむ形見の硯洗ひけり
枇杷の実や賛美歌流れる日曜日
二拍手や氏神様に受験生
懐かしき友の遺影に桜餅
首都高と並ぶ銀座の八重桜

志川久子

ひろかず

菊池和正

篠原富美子

栗原かつ代

万緑や冷たき蕎麦に長き列
椰子の実を讃えて歌う秋の宵
春の暮思ひの人に長手紙
雲の峰いつしか崩れ昼探し
春暁の夢の続きに夫の声
半月に夢の母恋い花霞む
よその子と竹の子の背は速く伸び
大鷹の巣作り枝と人集め
歌碑並び与謝のかけ橋初夏の雲
菓子を焼く屋根の草木に若葉風
自転車馬車を返して沈丁花
高らかな木遣歌ゆく夏祭
千年の時空を語る滝桜
あるじなき洋館やかたに枇杷のたわわなり
邯鄲しやんの調夜風に消へにけり
しらじらと明けゆく朝や葱洗ふ
客を待つ梅見の茶室炭朱し
踏むまいぞ歩道の割れ目堇咲く
橋桁の淀みに漂う花筏
三代生きて青春偲ぶ昭和の日
マスク取れ紅差し出かけ風薫る
幻戯山房滑りの重き白障子
恋情の賞味期限よたかななよ
しがらみを保留中です冬紅葉

夭折の少女窓から白山茶花
揚雲雀忘れられぬは歌ばかり
向日葵の花束抱へ笑顔あり

青木良子

客人の咽うならす冷麦茶
何時の間に過ぎ行く日々の歌唄ふ

△ 乳母車春のひかりを積んでいく
真田正

どちらにする針を持つのはいずれも菖蒲

老プリンター鳥の首絞め紙吐き出す

山桜硬いつぼみが寒そうな

熊が出る手を打ちながらとどまつ林

△ 夏の川歌碑は一文字欠けている
伊藤菖蒲

歌を吐く汗はマイクに伝わって

御田植や型なき祈り歌となり

廃城や栄華の残滓春の月

緑陰やここは映画のエピローグ

中村想吉

さよならを歌に託して卒業す

バス降りてすぐ歌う母夏きざす

子どもには子どもの矜持秋燕忌

旅人と知られず旅へ冬隣

篠智恵子

遠火事と朝に加ふる日記かな

ハーレムに歌声響く冬の朝

秋日和風のやうに去りし父

阿波をどり伸びた背中の女衆

甥っ子の産毛は髭か風光る

隣人の引越祝梅雨寒し
炎天に風となりけり応援歌
八十路過ぎやつてみようか上り鮎
春の夕くれ香りくゆらせ苦の家
真篠みどり
山田壮佑

だいこんとからすみが当て春の爛

行く春やまつぴらごめんと逃げ去りぬ

微醺にてそぞろ歩きの臃かな

転属の部署にも慣れて花水木

国境に歩哨の姿ミモザ咲く

物忘れ進みし母の七草の唄

熱爛や酔いて飛び出す十八番歌

あの宇宙そらに散骨したし冬銀河

学生の地歌の艶や缶ビール

歌仙絵を見遣り緑雨の飛雲閣

下校子の大き歌声青葉風

「故郷の空」歌ひ上田の雲の峰

夏の日の水美味かりし部活かな

初蟬が力の限り歌う朝

麻のシャツ広げて吊るす立夏かな

ぶら下げた夜店の金魚頬紅し

ふと香り人呼びとめる沈丁花

螢火や昨夜の夢を尋ねをり

聴いてをる水琴窟や音涼し

歌詠みの歌に救わる夏の月

木佐淳子

加藤木浩子

櫻庭寛

兵頭昌子

蒲公英の天地を染める地雷原
古矢敏光

終戦日岸に無人の舟ひとつ
寺の子を寺に嫁がせ鳳仙花
集落に同姓多し立葵
リアルトを潜る棹歌秋惜しむ
無になつて啜るソーダよ空は青
中村かりん

乾杯やエビスビールの金の缶
公園へ今年初めてのサンダル
梅雨晴やむかし縁ある人とゐて
口遊む異国の歌よ月涼し
水琴に夏の音まじる詩歌館
渡邊昭子

△
アイリスの一茎折れて雨あがる
春雷や枯れ枝の蜂目覚めたる
梅干すや赤子の尻の勢ぞろい
花菖蒲万葉の歌せまりけり
澤田俊平

さんざめく夏は十葉冬の星
緑陰や児の声木々の声のする
水琴窟縄文の音盛夏かな
夏座敷古代思ひ紐解かず
蜘蛛の巣の花びらひらとなびきけり
天野太喜

閉じきらぬ黒き筆箱春の風
桜住む斜面45°の堀
故郷の案山子と案山子向かい合ふ

△
亀鳴くや胸元のチョコしつとりと
鳥歌い雨上がり知る立夏かな
川津景子

群れなして見下ろし歌うは鴉の子
荒れ庭の池に佇む群れ金魚
冬晴れに微かに響く猫の鈴
モニター音響く病棟冴ゆる夜
瞑想のアプリの声や春憂う
田村裕子

◎
恋すてふヒロインみたいなサングラス
びろびろとアロハ煽りて風の行く
夏の浜野心のような光浴ぶ
月と雲わたしの恋の二進法
松浦道夫

○
大空を飛ぶ夢見れば朝寝かな
草むしり土偶のごとく休息す
旧道を馬ポクポクや男郎花
菊人形咲かぬ部分は借着して
春めくや坂東武者の相聞歌
小西泰子

薄墨の如水無月の風渡る
大蟻の尻引きずって停留所
ありんこや吾けふもまたいそかしき
昭和ゆり泰山木の盛る家
夏休み耳に逆らふ母の声
石彫りて生まるる天使風薫る
小池とも子

ハンカチを差し出し何も言はぬ人
麦秋や中島みゆきの歌勁し

○ 母の日の母の似顔絵皆笑ふ
哲学を捨てて海月の透きとほる

佐助

入り口の右手が宵待指定席
紫外線避けて駆け込む宵待屋
故郷からなみすけに住共白髪
変わらない居心地のよさ宵街や
裏通り小さき紫陽花奥ゆかし
ぶらんこを振つて世界を揺らせた

千葉直美

臍帯を切る音微か麦嵐
あを梅の蜜満ちてゆく瑠璃の壺
水占の浮かみしみづの螢かな
風死して賛歌あふるるスタジオム
ノーサイド・ゲーム凱歌のごと夕立

月光ほろり

片恋の草笛歌とならぬまま
発情のこゑに耀歌の山笑ふ
歌丸に二世は要らず古扇
ブギ歌ふ婆の若しよ年忘
短冊に背をのぼしてぞ歌はじめ

尾田一郎

△ 文語調唱歌なつかし花の宴
ひまわりや歌よみがへれウクライナ
おおらかに揺るる芭蕉や詩歌館
萩外荘誉の主の冬の夜
春の宵歌書に寄り添う酒杯かな
犬小屋の片付けられし夏木陰

山内禎祐

秋あかねツツと食みけり露天の湯
歌さそう一本道の若葉風

小豆嶋勇誓

骸なる螢をさなごに抱かれり
噴水に作業着の顔輝けり
をさなごの傘ひと小間に青紫陽花
境内の紫陽花に聞く砂利の音
今の世はそのひぐらしと蝉が泣く

亀田幸郎

梅雨晴れ間入道雲がしゃしゃり出る
霧深し大地が白い息を吐く
部屋の隅豆忘れられ立春に
さわさわと若葉踊りて鳥歌う
亀二匹池のほとりで首伸ばし

池野良男

夾竹桃暑さに負けず庭掃除
降りやみて鮮やかなるは梅雨景色
ひぐらしに急かされながら暑さ去り
「千の風」父の遺影に歌いけり
朝顔や入院の父見送りぬ

池野宗子

朝顔に何を告げるや父の顔
朝顔や父に別れを告げる日に
スカイツリー頂き隠れ梅雨の空
心太悩みもつるり通り過ぎ
応援歌くちびる焦がしホーン吹く
サーファーと実朝の歌碑土用波
発車ベル浜辺の歌の駅で下車

喜多川千恵子

△ 湘南の祭囃子は「 130
菜種梅雨老ピアニストのソナチネ
夏空に少女ら歌ふ」ポップ

築山史子

△ 立ち漕ぎの少年限りなく夏へ
薫風を寄せて俳誌の頁繰る
羅を羽織つて聴いてゐるショパン
濡れてなほ透きとほりゆく風鈴草
桃食えば汁のやり場に新聞紙
ちりとりに箒寄り添う秋日和

塩豆

△ 鯛雲友に届けしパン二枚
ひまわりや夕日に叫ぶ少女あり
溶けゆくや友の寝顔とアイスラテ
産声を聴き祖父歌ふ聖母月
瑠璃歌ふ日ごとに軽き試歩の杖
聞き流すことも一芸蟬の歌

下嶽孝一

△ 踏ん張つて生きて歌あり七変化
詩歌館雨に息づくひきがへる
老人ホームの歌や踊りや雲の峰
△ 子の名前薄れし鞋や大夏野
△ ひとりなら風喰う昼餉大花野

田中有楽

△ 萩窪の十字路丁字路はつっぱめ
武蔵野や追ひつ追はれつ鳥の恋
葱坊主お前けんか売ってんのか
△ 紫陽花の歌声じつと聞いている

田口直哉

蟻群がる此の木甘いのもしれぬ
するめ烏賊するり魂抜かれおり
亀の子やつまらぬことに風もなし
ふらここに小さく揺れる子守歌

松浦恵美子

△ じめじめへ気の向くままにかたつむり
さわさわと風つかみたき新樹かな
夏空へ大観覧車解放す

戸矢一斗

△ ソーダ水しゅわつとはねて歌を詠む
翡翠の川のどこかにクラムボン
逆さまに取り出すプリン五月富士
菅貫の向かうも曇り空かしら
髪洗ふラジオは二十五時を告げ
あたたかきものの一つに涙かな

永野彩

△ 雅なる万葉恋歌紅の花
夏の夜や舞いて奏でる星の歌
月の夜や遠き記憶の子守唄
紫陽花を映して月は瑠璃となり
名月を映して飲みたや朱ときの杯
イパネマはシャワーを浴びる君の歌

遠藤郁真

△ スコールがここぞと屋根無し駐輪場
巡礼歌の本堂囲み蟬しぐれ
△ 叡山に雲北山は時雨かな
新緑や悲しい時は腹が減る
稲妻やまぶたの上を剃る床屋

高橋明夫

△ 遠くまで飲みに行くなり秋日和

中西京子

歌ひつつ手つなぎ帰る朧月
待ちぼうけの歌口遊ぶ夕焼雲
婚の荷の積まれゆきたる春の雨
マネキンの腕伸びやかに風光る
風吹きて歌と重なる風鈴よ
響いてる夏と歌う女の声

山田実優

五月雨に負けじと上げる童歌
提灯の囲む太鼓と合わす歌
デパートに流るる歌が夏と言ふ
泰山木初めての花見つけたり

徳久あき

園児らの喚声見おくる新樹かな
レンチンの夕餉に庭のパセリ添え
アスファルト照らされくねる大蚯蚓
聞きながす母の小言や茄子の花
迷ひ来し蛙絶叫恋の歌

みのうゑみさを

目に青葉水琴の音の沁みとおる
目に青葉地霊の祈り水琴歌
外一步目に飛び込みし桐の花
寝ころべば富士より高く月見草
口ずさむ一人の「第九」冬の街

大本伸彰

△ 葉桜やハミング洩るる保健室

キヤンパスに集ふアカペラ蔦若葉
菜飯食ふ上り框にどつかりと
端居する父の背中に物申す

大本恵子

如月や幾何学模様の床にゐる
氏神の鈴玲玲と初参

△ 大鍋に年越蕎麦の滾りけり
ぼろぼろの万葉秀歌額の花
どくだみといえどまじりけなき白よ

永井恒子

◎

緑蔭を中へ外へと芝手入れ
夏休五楽章までつい作り
胡桃割る弁証法の然りかな
しゃくしゃくと独活食みながら聞く演歌

中村たま実

もう住まぬ家の修繕ななかまど
入梅の刀身に打つ砥の粉かな
本籍に旧町名や初桜
同意書の朱印の湿り半夏生

浅田シグレ

夏停電今日だけ歌のおにいさん
メスホタル一番星に初恋を
熱暴走水着を着だすGPT
日盛りや徹子の飴は無事だるか
チラリズム神代も覗くうなじ汗
樹頭一花泰山朴の名残かな
段丘の古今の風や青芭蕉
芭蕉玉解くや詩人の旧書齋

濱田ふゆ

振花に歌やてんでにをどるごと
開け放つ書斎の風や萩桔梗
黒鍵の多き校歌や春の風
新緑や英語ノートに赤き線
四つ這いの背に乗る騎手や子どもの日
白シャツの君の背中の見ゆる席
坂道で子の手は離れ冬紅葉
裏先の小川に乱舞のほたるかな
廃屋に残る葦簀の侘しさよ
鮮やかな紫はえる桐の花
あとおおと新茶含めばほっこりと
爽やかなかほりただよう新茶かな
窓越しに漏れ来る歌や柿の花
梅雨に入る色やはらかき和菓子店
馬の眸のはるかを見るや夏帽子
木漏れ日の淡くなりけり烏瓜
新雪やものの影みな青みたる
朝歩き川面に紅さす合歡の花
待つてね鬼籍の父母送り火の宵
新盆や指のリングに浮かぶ顔
秋近し美瑛の森に風渡る
虫時雨詩歌を口に湯船かな
木枯や瀬戸の鯛めし喫しゐて
教え子の花嫁衣裳花ミモザ

原田晴美

旅山人

秀鳳

槇枝聖子

爽子

田中秀子

薔薇の香や背筋伸ばして結跏趺坐
若葉風「週刊朝日」終刊号
○ 支持率の折れ線グラフでふてふ来
菜の花や被爆ドームの地の隙間
△ 冬隣り食卓よぎる鳥の影
「カワイイ」なる言葉うつせえ梅ふふむ
発見はえごの猫足詩歌館
日盛りの廊下の艶や詩歌館
初夏や庭師ふたりも景となり
席題に難儀してをり百日紅
玉砂利も草木も喜雨をまとひけり
○ 白玉や娘と語る妻のこと
駅前で漬かる足湯や百合の花
水尾伸びて薄氷の端の小揺らぎぬ
踏台のほどよき高さ煤払
螢火や父の歌詠む七回忌
星々の歌大きな耳の夏
洗濯機が歌ってるよと孫の夏
露草やさやかな歌声散歩道
立葵夕餉の匂いはずむ声
歌運ぶ若葉風には車夫いらす
春シヨール靡く様さえ歌となる
子が見上ぐ玉巻く芭蕉誇らしげ
十六夜と木の装いは恋仲か

生島融

穴井悦子

齋藤雅一

花音

戸田かえで

西瓜抱くやうに幼子抱へけり
下平紀代子

生き急ぐ理由は聞かず虎が雨
短夜や伊勢と百夜と六歌仙
歌ふごとえこのねこあし揺れてをり
蛇の足見えたと思ふ幻戯邸
声揃ふデイサービスの花の歌
想ひ出の歌詞浮かび消ゆソーダ水
伏木よう子

キャンブの夜はにかみつ子も歌ひ出す
パナマ帽ひよいと浮かせし祖父の礼
薄氷やめくれぬ頁ある詩集
空蟬よ命謳歌の蟬時雨
真理庵

シーボルトの蒼き瞳のおたくさよ
コロナ禍にアロハシャツ着てハワイ想う
昭和レトロクリームソーダの泡儚
白鷺城の件に訊きゆく宇露終戦
初蝶や乳白色の遊び紙
大友まりえ

告知受け日は静かなり蟬時雨
順を待つ手の白菊の確かなり
讃美歌に嗚咽広がり菊白し
玉ねぎの白き命へ皮を剥く
ひらひらと翅の隠るるよひらかな
早々と夫逝く年の梅じたく
坂爪紀弥江
染谷道代

大みみずニヨロリ夕立のあとの虹
らつきょうの匂いの先に仏間の灯

干からびたみみず此処そこ夕立来ず
三倉十月

脱衣場に演歌の細く明早し
梅雨の月仏語の歌のボンボンと
山桃の染みは模様恋の恋
葬列の讃美歌ずれて夏日影
蜜豆や夫の泣きし挿入歌
主なき机の上の五首の絶唱
近藤絢子

桜見る最期の想ひ歌いけり
祖母見上げきょうしゅくつと聞いた夏
鳴けぬなら歌ってみるかホトトギス
図書館や借りず飛び出すスマホの音
夏帽子脱いで深々黙祷す
丹沢借景

庭いじりしばし忘れて蝸牛
美術展窓を外して搬出す
枯れ草や背中に着けて二人連れ
朝顔の萎えた花とり日課とす
潮見悠

カラオケのドアから漏るる卒業歌
五月闇ノートに歌詞を書き写し
鼻歌が熱唱となり日焼の子
寝冷子の鼻歌最後まで聴きぬ
絨毯の毛足に沈む歌留多かな
微かなる夫の鼻歌胡瓜もみ
平野恭子

△ 梔子の汚れてゆくよ匂ふまま
△ 吃音の少年の夢青写真

△ △

築山をなだれ落ちたる白躑躅
初雪や試し書きするボールペン
江ノ電に手を振る子らの夏帽子
揚羽蝶の瑠璃の一闪風さやぐ

広田妙子

夕焼けのあふるる谷戸に帰り来ぬ
夏うぐいす歌垣のごと鳴き交はし
料理書の隅に母の字入彼岸
春うららウチのセコムが舟を漕ぎ
薬に木洩れ日さしてカフェ香る
汗ぬぐい椀子積み上げイーハトブ
極楽にちゃぽんと沈む冬隣り
鼻歌の調子も上がる爛チロリ
玉砂利の音響く空初燕

古賀昌代

宮崎晴久

コロナ禍に静まる街や揚げ雲雀
せせらぎをずっと見守る青早苗
かすみゆく童の背中河鹿笛
歌い合う二秒間隔恋螢
雷神に神の雷落とされた
こいのぼり子どもの日には元気色
めだか達仲良く歌う蓮の池
にわとりが仲良く暮らす梅の庭
雨しくしく空を見あげてにじいばい
ポツポツポツひれや体に落ちてくる
今何日？あともうすぐで夏が来る
気持ち良いこの季節には風が来る
私たちいつもえさやりもらえるね

岡畑俊佑（九歳）

佐伯美羽（九歳）

角川庭園開園15周年記念 詩歌館まつり



右から司会者の堀田季何氏、歌人の小島なお氏、西村麒麟氏

10月29日（日）、東京・杉並区角川庭園（幻巖山房すぎなみ詩歌館）にて、開園15周年を記念した詩歌館まつりが開催された。詩歌館まつりでは、対談「俳句ミーツ短歌」が行われ、同名の著書を刊行された堀田季何氏の著書「俳句ミーツ短歌」が話題となった。

が司会進行を務め、第65回角川俳句賞受賞者の西村麒麟氏、第50回角川短歌賞受賞者の小島なお氏が、俳句と短歌について熱い思いを語った。まず、西村氏と小島氏それぞれの自選四句（首）と相手の好きな四句（首）を選び、俳句と短歌の特徴と異なる点について議論を交わした。「短歌は作品から読み手の肉声が聞こえる。俳句は読み手が作品に投影される」「良い俳句は良い短歌にはならない。逆も然り」「俳句は先人の功績を踏まえつつ半歩進むことを、短歌はいかに先人の作品を覆すかに重きを置く」など、似て非なる両者の輪郭が浮き彫りになった。

また、最後には西村氏が短歌を、小島氏が俳句を披露。西村麒麟 短歌

夜よりも暗き眼の鼻が表紙に二羽「茂吉の百首」

小島なお 俳句

ブックレビューまばたきに眼のひやひやす

『角川俳句』2023年12月号、俳壇ニュース

短歌時評 鳳仙花とマヨネーズ

小島 なお

去る十月二十九日、東京都杉並区にある角川庭園にて開園十五周年記念「詩歌館まつり」が開催された。催しのひとつとして俳人の西村麒麟さん、俳人であり歌人でもある堀田季何さんと、歌人の私で話をした。テーマは「俳句ミーツ短歌」。これは堀田さんの著書から借りてきたタイトルで、対岸の詩型である俳句と短歌を出合わせようという趣旨である。話題になったのが麒麟さんの句。絵が好きで一人も好きや鳳仙花

「鳳仙花」が十分いいことは前提として、歌人なら結句に何を持ってきたか、と考えることに。たとえばマヨネーズはどうか。絵が好きで一人も好きやマヨネーズ。収まりがいいのは当然鳳仙花である。けれど、マヨネーズのあの素材の味をすべてマヨネーズ味にしてしまう明い強かさ、は、「好き」の押し強さと通うのでは、とも。型の中心へ向かって言葉やイメージが収斂してゆくのが俳句なら、型をはみ出そうと拡散するのが短歌ではないかと常々思っている。マヨネーズ案は会場で賛否それぞれの反応があったが、短歌っぽいこのこと。ジャンルを超えてミーツすることは「らしさ」を考えるきっかけになる。（歌人）

『朝日新聞』2023年12月17日朝刊、短歌時評



角川庭園開園15周年記念詩歌館まつり

10月29日（日） 東京・角川庭園

角川庭園は、杉並区に寄贈された角川源義氏の旧邸宅を整備した庭園。その開園15周年を記念して、詩歌館まつりが開催された。午前中には1000句を超える投句があった15周年記念公募俳句の優秀句発表・表彰式が行われた。

午後からは堀田季何「楽園」主宰の司会で、第65回角川俳句賞受賞者の西村麒麟「麒麟」主宰、歌人で第50回角川短歌賞受賞者の小島なお氏による対談「日本語を研ぎたい『俳句ミーツ短歌』」が行われた。対談の中で俳句と短歌の違いについて、表現方法や言葉選び、推敲の過程など俳人、歌人それぞれの視点から意見が交わされた。俳人であり、歌人でもある堀田氏は「最近になってようやく俳句と短歌の両方を詠むことが世間的に認められてきた」と語り、最後に、俳句と短歌の垣根を超え西村氏による短歌、小島氏による俳句の披露も行われた。

『俳句界』2024年1月号、俳句界ニュース

編集後記

二〇二三年版の「角川庭園の短歌・俳句」をお届けいたします。開園十五周年を記念して行いました俳句大会の作品と詩歌館まつりでの角川賞対談の要旨を合わせて掲載させていただきました。

昨年二月、JCOMテレビの取材を受けました。その際、「俳句甲子園、短歌甲子園が評判になっていますが、角川庭園には、野球で例えるなら松坂大輔級の俳人、歌人に来ていただいて指導を受けています」と話しました。詩歌の館として、角川庭園ほど贅沢な場はないと確信しています。

十五年にわたる詩歌活動の結果の一つとして、この小冊子が編集できました。これからも、より多くの人たちが、角川庭園で、詩歌を楽しみ、学んでいただければと思っています。

（岩石隆光）

二〇二三年版（角川庭園開園十五周年記念号）

すぎなみ詩歌館

角川庭園の短歌・俳句

十五周年記念俳句大会／詩歌館まつり「角川賞対談」

発行日 令和六年（二〇二四年）一月三十一日

発行・制作 特定非営利活動法人 すぎなみ学びの楽園

俳句事業部

住所 東京都杉並区荻窪 3・14・22

電話 03-6795-6855

編集レイアウト 山下青史

表紙・扉カット 浅野純子